



教職大学院 Newsletter

No. 162

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.8.22(公開版)

附属の存在意義 ―二重の「協働探究」研修の場―

福井大学教育学部附属義務教育学校 校長
福井大学教育学部附属幼稚園 園長
福井大学連合教職大学院 教授

牧田 秀昭

6月3日、4日に、福井大学教育学部附属幼稚園・附属義務教育学校の教育研究集会を開催した。規模縮小ながら、3年ぶりの対面(一部ハイブリッド)での開催で、子どもにとっても教師にとっても有意義なものであったし、参観者にとってもこれだけの公開は久しぶりで、授業を見ることに枯渇していたということもあるのだろうが、概ね高評価を頂いた。参観者・助言者・協力者・協働研究者の方々には感謝申し上げます。

附属学校不要論は根強い。教育実習なら公立校でも可能、研究が公立校に役立っているか疑問、そもそも児童生徒数も教員志望者数も減少の一途を辿っているという実態等、枚挙にいとまがない。各大学、附属学校は、存続のために様々な手法をとっている。附属学校でいうならば、研究主題に現在の学習指導要領に関するキーワードを引いている学校が増えている。「主体的・対話的で深い学び」「資質・能力の育成」「教科等の特質に応じた見方・考え方」「探究学習」「個別最適な学び」「協働的な学び」等である。本校では、旧附属中時代の2002年に設定された「探究するコミュニティ」が、サブテーマをその時々で変えながら、義務教育学校になった現在までの20年間、一貫して研究テーマの一角に掲げられてきた。一見

すると、マンネリで進化・発展のない研究のように周囲からは感じられることもあるだろうが、実は当事者にとっては届きそうでなかなか届かない、半永久的なテーマとなっていることを実感している。これは本校の校訓「自主協同」が、シンプルながら、生徒たちが求めようとすればするほど遠ざかっていくような感覚に似ている。「生徒主体」による、「探究」「省察」「コミュニケーション」「コラボレーション」を、教科学習、総合的な学習の時間、特別活動等で、一貫して問い直しながら追究を続けてきているのであり、この追究そのものが学校文化になっている。時代がやっと追いついてきたような印象を受けるのは、本校が随分前から使用してきた「探究」「省察」「協働」が共通語になってきた現状を見れば、あながち間違っていないだろうと思う。探究学習のフロンティアとしてこれまでも提案し続けてきたし、インクルーシブ教育とPBLの関連も重要な視点の1つとして、今後も進化しながら研究を続けていくだろう。

内容

巻頭言 (1)
院生自己紹介 (3)
インターンシップ/週間カンファレンス報告 (19)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより (21)
月間カンファレンス/ラウンドテーブルだより (25)
6月のラウンドテーブル報告/感想 (34)

しかし、これだけで附属不要論に立ち向かえるとは思っていない。本附属のもう一つの重要な存在意義は、「協働探究」する教師を育成する場であることだと捉えている。旧附属中では、教師たちの協働研究組織として全体研究会の他に、これも2002年に、授業研究の充実を図ることが目的のABCD 4部会が設置され、今も時間割上に位置付けられている。教科や年齢、附属での経験年数をシャッフルした、同じ目的の部会である。カリキュラムや授業の考え方やつくり方、振り返りの意義や方法、実践記録の書き方、授業参観と事後検討会等、話題は様々である。各部会のファシリテーターは「研究企画（いわゆる研究部）」が務める。そしてその「研究企画」のメンバーも、時間割上に位置付いている時間に打ち合わせを行うのだが、その場に連合教職大学院の担当スタッフが入ることが本附属の大きな特徴である。ただし、多種多様な疑問に一问一答式で正解を与えていくのではなく、あくまで考えるのは教師たちであり、大学院スタッフからは考える視点が与えられたり、一緒に考えたりしながら、実践そのものや研究の方向性に対して示唆を得ている。研究企画のメンバーは、自らが経験した、この「支える」感覚を大切にしながら部会運営にあたる。いわゆるコーディネーターやファシリテーターとしての素養を培うのである。幼稚園も加わったかなりの人数に及ぶ全体研究会（実践研究会）も小グループ（メンバー構成は内容による）での議論が中心で、基本的に同じ構造だが、そこでも小グループの議論の質の向上を支えている。さらに、前期課程・後期課程合同の教科会が時間割上に位置付いており、9年間を見通した授業やカリキュラムについての日常的な対話は、それ自体が価値あることと考える。そして、語られたことをもとにしながら実践記録を執筆し、読み合うことも伝統となっている。「語る」「聴く」「書く」「読む」というサイクルが、教師たちによって運営されているのである。

教師の学びと子どもの学びは相似形であることは周知のとおりである。子どもに「協働探究」を組織するのならば、教師自身に「協働探究」の経験が求められる。有名講師の講演を聞いて終わるのではなく、どこかの出来合いの教育方法を持ち込むのではなく、教師自身が協働探究の当事者となるのである。本校園はそれがシステム化されていて、微修正を重ねながら長い間大切に継承されてきた。本校園に赴任した教師たちは、その歴史的厚みも感じるだろう。そして自身の参加の様態が、コミュニティの周辺部から徐々に中心部へ移行していくプロセスも実感するだろう。教員数が少ない幼稚園の場合は、連合教職大学院スタッフを交えて全員で子どもの遊びの見取りを披露して語り合うのだが、基本的に構造は同じである。講義形式で学んでいくのではなく、自分たちの語りと傾聴を大切に「協働探究」の場となっている。まさに、中教審の審議のまとめ「『令和の日本型教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて」に明記されている「自らの日々の経験や他者から学ぶといった『現場の経験』を重視したスタイルの学びがより重要になってくる」ことの具現化であると言っていいだろう。

教師の「協働探究」研修の場としての機能は、本校園から公立学校等に異動した教師たちの活躍を見れば納得である。異動先の状況を見極めながら、改革の渦を巻き起こしている教師を何人も思い浮かべることができる。「すぐに役立つ」ものを貴ぶのではなく、自身の経験の中で「じっくり、ゆっくり」と腑に落ちていったことが本当の力となる。新たな課題はたくさんあるが、それらの解決も含めて、本校園の、二重の「協働探究」研修の場としての存在意義を見失うことなく歩み続けたい。



院生自己紹介

新しい院生の自己紹介を掲載しています。今回は4回目、学校改革マネジメントコースの13名です。



一瀬 憲幸 いちせ のりゆき

今年度、学校改革マネジメントコースに入学しました一瀬 憲幸（いちせのりゆき）と申します。現在は福井

県美浜町にある美浜東小学校に勤務しています。

教員に採用されてから20年余り、小学校2年生から中学校3年生の担任を経験させていただき、主に生徒指導や体育主任を中心に校務分掌を受け持ってきました。また、昨年度までは5年間、美浜町教育委員会で派遣社会教育主事として勤務してきました。主に美浜町の人権啓発と人権教育に携わらせていただき、学校での出会いとはまた異なる、沢山の方々との出会いを経験させていただきました。

学校現場では、自分なりに「誰もが気持ちよく活動できる環境の確立」を考えて従事してきたつもりですが、今回の行政現場での経験で子ども達や教職員はもちろん、更に、地域の方々、行政の方々等、学校に携わるすべての方との「繋がり」を意識し考えるようになりました。繋がりを大切にするために相手が気持ちよく、思いや考えを伝えてくれるような「雰囲気」を自身が持つこと、雰囲気作りから「対話」を持つことの大切さを痛感しました。今後、学校現場で「対話」を媒介にし、学校がめざすゴール・目的を共有すること、それを共有した上での連携と協働を進めていきたいと考えています。

繋がりを意識し、雰囲気や対話を重視してきたといっても、それは自分自身の感覚的なものに過ぎません。自身の感覚は今後も大事にはしていきたいですが、それだけでは説得力に欠け、具体的な実践例と

しても乏しいものと言えます。学校現場、地域、行政がつながり、学校が創造性のある学びの場所となるような方策を理論として学び、現場で実践していきたいと考えています。お恥ずかしい話ですが、ずっと感覚と勢いのようなものを頼りに仕事に従事してきましたので、教職大学院のお話をいただいた時には、かなり熟考することになりました。果たして、自分が入学していい場所なのかと……。志すにあたり、何人かの自分自身が信頼している方に相談しました。その方たちとの「対話」がきっかけとなり入学に至りました。自分自身が教員として現場で活動できるのは残り十数年余り、年齢的に学校をマネジメントする立場になっていかななくてはならないですし、なっていきたいと考えています。時代の変化が大きくなる中で「常に学び続ける教師」であり続けることが必要であり、また、そのためには環境が欠かせません。これからの学校をマネジメントしていくためには、自分自身が「更に常に学び続ける教師」である必要があります。今回の教職大学院での経験を通して一人一人の教師が安心して学びに打ち込める環境を構築する一旦を担っていかれたらと思っています。学校に携わる教員・地域・行政の方々が心のゆとりをもって気持ちよく活動し、更に連携と協働が深まる方策を理論として学び、現場で実践し、研究する、これが私の2年間に向けての思いです。

教職大学院に入学して間もないですが、これまでの合同カンファレンスやラウンドテーブル等で、校種や職種を超えた多くの方々と「対話」をすることができました。皆さんの思いや考えを聞くことの素晴らしさはもちろんですが、自分自身の思いを伝えることの大切さを痛感します。先日の合同カンファレ

ンスの中で、私が研究実践の内容として考えている内容のひとつである、学校での協働の一步目としての「minimini ワークショップ」（先生方のコツとアイデアの共有する対話の場）を話題としてお話しさせていただきました。まだおぼろげながらではありますが、自分自身の思い描いていること、今後どう繋げていきたいかという考えをお伝えしたところ、大学院の先生方や参加者の方にご助言をいただき、みなさんに背中を押してもらえた気がしました。緩やか

に持続できるよう、働き方改革の観点ともリンクさせながら具体的な内容を考えていきたいと思いました。「仕事がいっぱいいっぱいで大変な中でも考えることを止めずに、頑張っていってほしい！」との言葉をいただいたことが、心に響きました。改めて「対話」の持つ素晴らしさを経験できていると感じています。この2年間、さらにたくさんの方との「対話」を楽しみにしていきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。



伊藤 貴子 いたう たかこ

今年度より、学校改革マネジメントコースでお世話になります、伊藤貴子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

現在は、福井県立武生東高等学校に勤務しており、11年目となります。素直な生徒が多く、真摯に学びに向かう生徒たちと「ともに成長したい」と思う中でのあつという間の時間でした。9年間大好きなホーム担任をさせていただくとともに、「主体的な学び」を実践するための授業改善を進めてきました。

そのような中で、昨年度は久々の副担任となるとともに、観点別評価のプロジェクトチームのリーダーを担当しました。試行的に現2年生徒を対象に全教科で観点別評価を行い、その結果をふまえ分析会を開き、学校としての方針を共有する場を持ちました。このことは、学級、学年、教科にとどまっていた視座を学校全体、教師間の協働のあり方へと広げる機会となり貴重な経験になりました。しかし一方で、教師の協働や、目的、ねらいの共有化の難しさを感じたことも否定できません。枠組み自体は共有化できたものの、授業のあり方や生徒の見取りの観点の内実を共有できているかについての「手ごたえ」には課題が残ったのです。観点別評価については、今年度より始動しましたが、パフォーマンス課題や思考・判

断・表現の見取り課題、リフレクション活動について再検討していく必要があります。ともに学びあい、ともにつくり上げていくチームとしての学校づくりのために、どのようなことができるかという問いをつきつけられました。また、秋には独立行政法人教職員支援機構の研修を受講する機会を得ました。オンラインでの3日間という短期間の研修でしたが、他県の先生方と考えや取り組みを語り合い、それらから短時間で成果としての証をつくり上げていく時間はとても濃く、刺激を受けるとともに、「狩り」にできるようなわくわくした冒険的な時間になったのです。ただ、この学びを継続的に自分の中で生かし続けるには、そのような仲間や場所が必要だと感じました。これらのことが教職大学院で学びたいというきっかけです。

本年度は、今年度より開設された新学科「学際フロンティア学科」の担任をしています。高校の魅力づくりが課題となっていますが、学校のカリキュラム自体が魅力となる学校を目指しています。探究を核とした学校づくりが進められ、探究的な学び推進委員として、授業の中でも、思考を支える「ことば」「対話」を大事にしながら汎用的な力の養成に意識を向けています。

教職大学院生として3ヶ月が過ぎました。月間カンファレンスやラウンドテーブルを通して学校種や立場、年齢の異なる先生方、他県の先生方との語らい

はとても大きな学びであり、支えとなっています。毎回、先生方のそれぞれの取り組みに背中を押されながら、日々の実践を振り返り、自校の生徒たちに生かせる手立てはないか問うとともにヒントをいただいています。消化不良のところがありますが、捉えなおしの中で、もう一度落としているところです。

学校のチームの一員として、何を生み出せるのか模索中ではありますが、自校の先生方の思いをつなげ、教職大学院での学びを共有しながら、よりよい学校づくりを目指したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



植田 真美世 うえた まみよ

今年度より学校改革マネジメントコース（1年履修）に入学しました植田真美世です。嶺南教育事務所研修課に勤務しています。基本研修、研修講座、訪問研修など、嶺南地域の先生方の研修に関わる業務を担当しています。どうぞよろしくお願いします。

嶺南教育事務所には4つの課があり、県の行政職員と嶺南6市町の公立小中学校、県立学校の先生方が勤務しています。日々の業務や所内で開催される協働研究会を通して多様な気づきを得ることができ、視野の広がりを大変ありがたく思っています。教職大学院で学びたいと思ったきっかけは、担当する業務の中で、これまでの知識や経験では判断ができず行き詰まってしまうことがあったからです。さらに広い視野での考え方を学んでみたいと思い、昨年度は事前履修として、集中講座やラウンドテーブルに参加させていただきました。

教職大学院での学びは、直接答えを示してくれるものではありません。しかし、新しい考え方や必要な理論を学びながら、世代や地域、職種を超えた多様な人と経験を語り合うことで、状況や考えが整理され見えてくるものがあります。その日、そんな話題ではなかったのに、誰かの話を振り返っているうちにいつの間にか自分への気づきが浮かんでくる。何とも言えないこの不思議な感覚を繰り返し味わっています。

私は採用前に、なぜ教師になるのか、立ち止まってしまった経験があります。教師になって何をしたいのかが見えないまま講師を続けていましたが、ある年、初めて学級担任（小5）をさせていただく機会がありました。まさに悪戦苦闘、失敗の連続でしたが、職員のみなさんに助けていただき、得難い一年を過ごすことができました。中でも、子どもたちと一緒に「なぜ」を追いつけた総合的な学習の時間や、感謝の気持ちを表現しようと話し合いを重ねた六送会には、子どもたちと共にわくわくする時間をつくり出す喜びがあり、この時の経験が教員としての私の原点になっています。けれどもそれは、勤務する地域や学校の状況によって左右され、いつも同じように実現できたわけではありませんでした。置かれている環境が違うから仕方がないと、初めから諦めてしまうこともありました。

こだわりきれない私、立ち止まってしまった私、行き詰まってしまった私。改めて並べて見ると、手段にばかりとらわれていて、目的を見ていないということに気づかされます。また、示された目的の意味を捉え直すことなく「どう実行するか」を考えてきた私は、主体的ではなかったのだとも気づかされました。目的が明確になっていなければ主体的に考えて行動することはできないということ。これが、事前履修からこれまでを通して得た私の学びです。そして今は、様々な価値観がある中で、どうすれば共有の目的をつくり出していけるのか。前向きな暗中模索の日々を楽しんでいます。

ふと、我が母校、若狭高等学校の教育目標にある「異質のものへの理解と寛容」という言葉を思い出しました。今さらながら、だから縦割りホームルーム制だったのかと、腑に落ちる思いがあります（縦割り

ホームルーム制は、学科、学年を解いた縦割りのクラス活動）。自分とは違う多様な人と出会い、語り合える貴重なこの学びの場に感謝し、様々な対話を楽しみながら一歩ずつ歩んでいきたいと思います。



金澤 敏文 かなざわ としふみ

今年度より福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコースに入学した金澤敏文と申します。現在は東京都世田谷区にある東京

栄養食糧専門学校の教員として在籍しております。本学は開校以来 80 余年にわたり、専門学校として実践力を備えた栄養士及び管理栄養士の育成に取り組み、多くの卒業生を社会に輩出しています。学校法人食糧学院を母体として、東京栄養食糧専門学校（栄養分野）と東京調理製菓専門学校（調理分野）に分かれており、私は前者の教務部長を担当しています。教務部の職務は教務（授業）、学生指導（担任）、就職進路に大別されています。その他に委員会として、広報（学生募集）、職業実践推進、国家試験対策、基礎教育支援、研究・倫理、栄養教諭があり横断的に教職員を配置しています。これらの職務を統括しつつ、昨今のコロナ対策に明け暮れ苦心しながらも人材の育成、学生の養成に努めているところです。部下には自らの姿勢を正すこと、具体的には挨拶、感謝・配慮の念を忘れないよう留意させ、お互いに気持ちよく議論ができる風通しがよい環境を整えるよう、自ら手本を示しているところです（小さないざこざは多々発生、火消しにまわることあり）。一人ひとり学生に対する愛情を持った集団ですが、業務の量に忙殺され研究活動、自己研鑽ができていない状況が続いています。このような生産性が低く、イノベーションが生まれにくい環境を是正したいと考えています。本科に入学した理由の一つにはこのような背景があります。

さて、遅くなりましたが、これまでの自分について振り返りながら自己紹介を致します。私は福島県相馬市出身です。高等学校卒業後、大学への進学を理由に上京（正確には横浜）しました。「遊び」という教科書を片手に携えながら、もう一方では経済学を専攻していました。しかし当時は就職氷河期真っ只中であり、就職活動も満足な成果を得られませんでした。卒業までの期日が迫る中、飲食店でアルバイトをきっかけに調理への興味を持ちました。そこで思い切ってレストラン業界の門を叩きました。そのうち興味は調理から食品の機能性や栄養に移行し、その欲求を満たすために栄養士養成校（専門学校 2 年制）に入学しました。これは現職の学校でもあります。栄養士免許を取得し病院にて勤務、東京から福島に拠点を移し、実務経験を踏まえ管理栄養士免許を取得しました。忘れもしない東日本大震災が発生したのがちょうどその頃でした。被災者として多くのものを失い、非現実的な日々を送りましたが、この震災はこれまでの自身を振り返るきっかけにもなりました。まだ現職であった当時の担任にこれからの相談を持ち掛けたところ、思いがけず本校への入職を進められました。学生時代に専門的な知識・技能を備えた先生に敬意を抱き、漠然と「いつかああなってみないな」と思っていたので、その夢が叶いそうだと胸が踊ったことを今でも明確に覚えています。それから 10 余年、管理職として教務部を束ねる役割を課せられています。専門性を磨ききれないまま、管理職を任せられ正直、消化不良を起こしそうにもなりましたが、学生が卒業し社会人として巣立っていく姿を見送る度に、これでいいのだ、と呑み込んでいます。この学校では大半の学生が卒業と同時に専門的な業務に従事します。意外なことに、在学中に優等生であった学生ほど、社会において挫折しやすい傾向があり

ます。その原因は理想と現実の乖離によるものと考えます。「柔軟な思考」を持ちなさい。と学生にはアドバイスします。なぜならば個々がもつ「正しさ」という価値観は、出会う人の数ほど存在するからです。それらの考えを集約、咀嚼、醸成し、答えを導き出すことができる人財を育成することが重要であり、自分自身にも必要な思考だと考えます。極論を言えば「右を向け」と命令されても左を向く人もいますのですよ（私自身がそのように）ということです。そのぐらい見越しておくのが、よい塩梅なのではないでしょうか。

大学院での学びは、小中学校、高等学校の先生方が大半を占めると理解しています。おそらくその中で私は職業柄、特異な存在になると推察します。しかし、上級学校入学までに児童・生徒が享受した指導内容

について意見交換し理解できる機会は重要であり、大切に育て上げた児童・生徒をお預かりできる立場としては、この上なく有意義な時間を過ごすことができると考えます。私自身が学習した成果を職場に還元することで専門学校のあるべき姿が明確になり、単なる理想論でない教育を学生に還元できると期待しています。ごく小さい一歩ですが、教職大学院では「学習態度の形成と専修学校の在り方」を広義のテーマとし、個性あふれる集団が成す理想的なコミュニティを構築すべく、日々の研究活動に邁進したいと考えます。余談ですが、福島の実家に「おかって」といわれる台所が3か所ありました。世代（母、祖母、曾祖母）ごとに好き好きに料理を作り、食卓へ運び寄っていました。一見、生産性が悪いのですが、個性があり楽しい食卓であったと記憶しています。非常に奇妙なコミュニティでした。

新たな学びを学校経営に

黒田 佳昌 くろだ よしまさ



今年度から学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました黒田佳昌です。昨年度末に中学校（現任校）の校長を定年

退職し、現在引き続き再任用校長として勤務しております。

私は、特別支援学校を降り出しにして中学校、小学校副校長、義務教育学校副校長、中学校校長と37年間の教職生活でした。その間、専門教科である保健体育科の授業研究や運動部活動指導に力を入れてきました。校長としての7年間は、子供たち一人一人の成長のために学校はどうあるべきかということをいつも考えてきました。

私がこの進学を決めた理由は、校長職として学校経営をしてきたことが、子供や保護者にとって最善であったのか、教職員にとって教育活動に主体的に取り組む環境や教師集団をつくることができていた

のか、学校は、地域にとって垣根の低い距離の近い存在であったのかということを省察し、今後の学校経営に生かす機会がないかと考えたからです。校長という立場にあると、教職員は忙しいこともあり、よほど意に反することがない限り校長には進言しません。また、校長職は意外に研修の場が少なく、書物や教育雑誌から情報を得るしかありません。私は以前から立場や年齢、校種などの異なる多様な先生方とこれからの教育の在り方について話し合う機会があればと思っていました。そんなとき学校に届いた働きながら学ぶことができるという連合教職大学院の案内が目にとまり、居ても立っても居られず東京サテライトの福島先生のところに説明を聞きに伺いました。30分ほどの説明であろうと思っていたのですが、福島先生からは、2時間熱く連合教職大学院の学びについてお話をいただき、大変感銘を受けました。まさに私が求めていたものはこれだと確信しました。

4月からの月間合同カンファレンスに参加して、M2の先輩方や同期の方々が教育への熱い思いや直面している課題、組織改革への悩みなど、様々な先生方からの話を聞き、自分自身の実践を振り返り、考えていることを言語として表現し伝えることは、とても大きな学びであると感じました。また、ファシリテーターの先生方が冷静で、場の雰囲気を柔らかくし、誰もが意見を言いやすい雰囲気づくりやメンバー一人一人に寄り添う姿勢、場の空気を和ませる力量には学ぶところが大変多いです。

6月のラウンドテーブルでは、教員だけでなく様々な職種の方や教育を受ける側である中学生から大学生まで参加しているような学びの場があることに驚きました。いろいろな立場の方の実践報告を聞き、そこで意見交換をするという今まで経験したことのない学びの場は、新鮮で興味深いものであり改めて教育に真摯に向き合う姿勢と勇気をもらいました。

この3か月半のなかで、カンファレンスやラウンドテーブルで先生方の教育に対する思いや考え、様々な教育実践を聞くことで、自分が考えてきた教育課題の中で何を研究の柱にしていくのかが見えてきました。

近い将来、複雑で予測困難な時代を迎えると言われています。また、コロナ禍で学校現場は教育活動中止したり、規模を縮小したりしながら手探りで進めています。そして、今年度は学習指導要領が高等学校を含むすべての校種で全面実施となりました。子供たちの学びを止めるわけにはいきません。学校は、次代を生きる子供たちが自分のよさや可能性を認識し、他者を尊重したり、多様な人と協働したりしながら社会の変化をしっかりと乗り越え、持続可能な社会の創り手となるよう、子供たちの資質・能力を伸ばすことが求められています。

この連合教職大学院での学びを通して、校長として教師同士が互いに自己開示できる教師集団づくりを進めるとともに、子供の興味や関心等を生かした探究的な学習の充実や子供同士がかかわり合いながら異なる考え方が組み合わせられ、よりよい学びを生む授業づくりを目指す学校にしていきたいと思います。そして、教師が日々の仕事を楽しい、充実していると思い、互いに子供たちの成長を共有できる教師集団づくりを目指していきたいと思います。

この連合教職大学院での出会いや学びを自分自身の教育の集大成として、学校づくりに生かしていきたいよう努力していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



酒井 範子 さかい のりこ

こんにちは。今年度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました酒井範子です。教頭としての1年

目は、我が子もお世話になった勝山市立三室小学校でお仕事をさせていただいています。

ここで、三室小学校について紹介します。本校の校名は、福井県指定史跡として著名な「三室山」の名を冠して名付けられました。三室山からは、縄文土器が出土したことから、本校には伝統的学校行事「原始運動会」という面白い行事があります。この原始運動会

について月間カンファレンスでお話ししたところ、たくさんの先生方に好評！？だったので、運動会の紹介をしたいと思います。

原始運動会は、どんな運動会かという・・・子供も教師も原始人!?!になりきって参加する運動会です。原始人なので、もちろん裸足。体操服の上にオリジナル衣装をまとい、全校児童が4つの村に分かれて、競技と村まつりを楽しみます。児童代表を国王、校長先生を長老と呼びます。と、ここで、「縄文時代に国？」と突っ込みたい方もおられるかもしれませんが、その衝動は、どうか抑えてください。この運動会の楽しいところは、5・6年生が考えたオリジナルの競技で

す。毎年、新しい競技が考案されます。今年は、段ボールに描かれた縄文人に洋服やひげをつけていく競技が低学年の子どもたちに大人気でした。子どもたちのキラリと光る工夫を盛り込んだ競技内容に、グラウンドには、たくさんの笑みがこぼれます。また、応援は村祭りと呼び、「原始人が暮らしていたら、こんな生活だったんだろうな~」ということ子どもたちが真剣に考え、ミュージカル仕立てにしたものを発表し合います。三室小学校を卒業した我が娘たちは、10年以上経った今でも、この村祭りで作ったオリジナルソングを口ずさみます。子どもたちにとって、この運動会がどれだけ思い出に残り、忘れられない行事なのか分かります。お伝えするのが遅くなりましたが、本校は、40名弱の小規模校です。したがって、何百人と原始人が登場するわけではありません（笑）。

そんな、ふるさとを愛する三室の子に、先日「なぜ、先生になったのですか？」と聞かれました。教職大学院でお世話になっている私には、とっても大事な問いのように思えました。どうして先生に・・・。

私は、大学で書道を専攻しました。書道には、「臨書」といって、先人が書いた古典そっくりに真似て書く練習方法があります。ただ文字の形を真似るだけでなく、線質や余白の美などにもこだわって書きます。自分の手に「書風」がなじむまで、何度も何度も臨書を繰り返します。不思議なことに、書けば書くほど、練習すればするほど、身についていくものです。この時、私は、根気強く続けることのおもしろさを感じたのかもしれませんが。続けることは豊かさにもつながっていくと信じています。だから、先生にならなかったのだと思います。

教職に就いてから20数年、指導力のある先生方からスキルを盗もうと必死に先生方を観察してきました（つもりです）。教育書もたくさん購入し、読んできました（つもりです）。さらに、理論や柱がしっかりした教育実践家と呼ばれる先生の研修会や講演会には、自ら足を運び研修を受けました。勉強するのが楽しくて仕方ありませんでした。そのように前向きに学んでいるときには、人とのつながりもできました。そんな副産物が、さらに学びを継続させる動機づけとなりました。いつの日か、「教職を離れるときまで、学び続ける教師でいよう」と心に決めたほどです。

大学院に入学してから3か月が経ちました。月間カンファレンスやラウンドテーブルを通して、教職大学院の先生方や実践力あふれる先生方と学びあう中で、多くの刺激と充実した時間を過ごしています。自分が目指していたロールモデル「学び続ける教師」を継続させています。この「続けている」という自覚が私を支え、次への目標になっているのではないかなと思うのです。

先ほどから何度か前述にでてくる娘も、現在、教職大学院（1年生）でお世話になっています。ラウンドテーブル後の車中は、それぞれのグループでどんな話が展開されたか、話が弾み、止まりません。こんな貴重な時間を過ごせることもまた、楽しくてしかたがないのです。

これからの2年間も、自分が学び続ける教師でいられるかと思うとワクワクします。幸せです。どうぞ、よろしくお願いします。

新たな学びへの挑戦

砂川 誠 すなかわ まこと



今年度から学校改革マネジメントコースで学ぶ事になりました砂川誠です。

私は沖縄県の宮古島で育ち、沖縄県内の大学を卒業

後、平成7年度宮古島の小学校に採用され、今年度で教職28年目になります。その間、教諭を18年、教頭職を5年、行政職（宮古島市教育委員会）を5年経験してきました。そして、今年度の4月から再度、宮古島市教育委員会での勤務となっています。

さて、宮古島は、沖縄本島から南西に約300km、東京から約2000kmに位置し、島全体がおおむね平坦で、大きな河川がなく、ミヤコブルーと呼ばれる透き通った美しい海に囲まれています。人口は約55000人で、児童生徒数は約5000人、宮古島市立の小学校が16校、中学校が11校設置されています。私のこれまでの教職28年間は全て宮古内（多良間村立多良間小学校勤務も2年間あります）での勤務になります。＊宮古圏内は、宮古島市と多良間村の1市1村からなります。

ところで、私が大学院で学びたいと思うきっかけとなった出来事が2つあります。

一つ目は、1回目の宮古島市教育委員会勤務を経て、教頭として現場で勤めた経験からです。私の市教委での担当業務は、宮古島市で初めての小中一貫校の設置へ向けて教育課程の編成等、開校までの諸準備でした。その後、小中一貫校が開校されると、小学部の教頭として赴任し、昨年度の3月まで3年間勤務しました。開校へ向けての計画、準備を行い、そし

て、その学校で管理職として勤務する経験の中で実感したのは「教職員の主体性の大切さ」でした。教育の直接の担い手である教師が、子ども達の学びや成長を中心にアイデアを出し合いながら学校創りを進めていく事の大切さを強く感じました。

そこで、教職員一人一人が当事者意識を持ち、主体的に学校運営に関わり、教育活動を進めていける学校組織をデザインするための管理職としての知見を深めたいと考えました。

二つ目のきっかけは、昨年度の8月に宮古島市で開催された福井大学教職大学院夏期集中講座に参加し、最新の教育の動向や教育理論、他の都道府県の校種や立場を超えた先生方の考えに触れる機会をいただいたことです。私はこれまで、宮古島で行われている教育以外に触れる機会が少なく、それでいいと思っているようなところがありました。しかし、様々な先生方のお話を聞き、そして自分の考えを話すことで思考が整理されていく経験をすることができました。4月からは院生としてカンファレンスに参加していますが、参加するたびに新しい学びがあり、協働して学ぶ事の大切さを日々感じています。

現在は行政での勤務となっていますが、教育の転換期にあたり、新しい学びを支える教師や学校組織創りについて学びを深め、学校現場で管理職として生かしていきたいと考えています。学校、そして教師は子ども達の無限の可能性を広げ、伸ばしていく責任があります。そのために、どの子も安心して学び、子どもはもちろん、教職員も居心地のいい学校づくりのために学びを進めていきます。よろしくお願いします。



高尾 和人 たかお かずと

今年度より、学校改革マネジメントコースで2年間学ばせていただくことになりました高尾和人と申します。福井県坂井市にあります私立の幼保連携型認定こども園「まごころ認定こども園」の園長をしています。

当園は、園児の定員110名、職員体制は園長・副園長・主幹保育教諭2名・保育教諭16名・看護師1名・保育補助1名・事務職員1名の23名です(令和4年4月現在)。園の近隣には、サッカー場の「日東シンコースタジアム丸岡」や歴史ある寺院の「称念寺」等があり、それらの地域資源を活かした教育・保育は園の特色の1つです。ちなみに、私自身が「称念寺」の副住職でもあるので、「称念寺」の境内は、第2園庭のように使わせてもらっています。園の運営主体は、社会福祉法人至誠福祉会で、私はその業務執行理事も担っています。そのため、私の職務内容は、園のマネジメントのみならず、法人の運営にも及びます。小さい法人なので、私が直接事務に携わることもとても多いのですが、それはこども園を運営する多くの法人の悩みでもあると思います。

私は、昨年度4月、18年間園長を務めた父の後を継ぐ形で園長になりました。36歳のまだまだ社会経験も短い自分のような者が、園長の息子だからという理由で、長い間園を支えてくれている職員を差し置いて園長になることへのためらいや不安等は多くありました。しかし、職員や保護者の方々の理解や協力のおかげで、なんとか1年間園長の職務を務め続けることができました。職員や保護者の方々には感謝しかありません。

また、私は教育・保育の実践経験自体も非常に浅く、園長就任に至るまでのまごころ保育園(令和3年4月に幼保連携型認定こども園に移行)での経験は2年のみで、それも労務・経理などの事務と放課後児童クラブの支援員として業務が中心です。それ以前は、大学の地域福祉学科を卒業した後、小売業を営む一

般企業で4年半勤め、園を継ぐと決めた後に他の福祉法人を経験するために、児童養護関係の施設である母子生活支援施設で2年半勤めています。

小売業界で働いていたときは、標準化された店舗(チェーン店)の店長業務や物流倉庫で商品管理、流通のコントロール等の業務に携わっていました。特に店長業務に関しては、入社して3年ほどで、月販5,500万円程、従業員20名程の店舗のマネジメントを任されたのですが、経験の浅い者でも、組織的な教育や仕組み等のバックアップがあれば、ある程度の規模の集団のマネジメントをすることは可能なのだなと実感しました。一般的な組織マネジメント理論でよく言われることではあるのですが、現場における専門性と組織のマネジメントに必要な能力は必ずしも一致するものではなく、組織のマネジメントをする者には、そのための教育や能力の向上の方法が必要であると思います。

母子生活支援施設は、支援が必要な母子家庭を支援するための入所型の施設で、DV被害者のシェルターとして機能すること多い施設です。入所理由には、DV被害や児童虐待、家庭環境の不適切、母親の心身の不安定などの様々なケースがあり、それぞれの家庭の課題に応じた個別の支援を行います。また、支援が必要なのは母親だけでなく、入所児童も複雑な家庭環境で育っているため、心身に何かしらの課題のある児童が多くいます。そして、そのような児童は登校拒否になったり、学校でトラブルになったりすることも多く、そのようなときに保護者と学校の橋渡しの役割を担ったり、直接児童の登校支援をしたりすることもありました。そのような、学校との連携のなかで、学校でも本当に多くの福祉的な支援を行っていることを実感しました。学校の先生方のそのような取り組みには本当に頭が下がります。一方で、福祉的な支援が学校での先生方の業務を多忙にしている側面もあるのではないかと思います。学校における福祉的な専門職としてスクールソーシャルワーカー(SSW)がありますが、SSWはどの程度機

能しているのでしょうか。私は福祉の専門職でもあるので、機会があれば教員の皆さんに学んでみたい部分の1つです。

ここまで、教育・保育に直接関係のない活動が多かったのですが、このような多様な経験・知識が私の強みであり、1つの専門性を突き詰める経験のないことが弱みでもあると考えています。教育・保育の専門性は、現場で実践を積み重ねることでは身に付かないものが多いことは間違いありません。そのため、いくら私が机上で学び、考えを巡らせたところで、専門性の面では現場の職員に明確に劣ると思っています。しかし、先ほど申し上げた通り、現場における専門性と組織のマネジメントに必要な能力は必ずしも一致するものではありません。そこに、私が当園や地域における教育・保育の質の向上に貢献できる理由があると思っています。



中今 純一 なかいま じゅんいち

今年度より学校改革マネジメントコースに入学しました。この2年間で、現場ではなかなか学べないことを、たくさん学びたいと思っています。よろ

しくお願いいたします。

私はこれまで小・中学校で学級担任をはじめ、学年主任、体育主任、研究主任、生徒指導主事などを務めてきました。学級担任を務めている時は、毎年、所属学年が変わり、担任をする子どもたちも変わっていました。新年度になれば、「学級の子どもたちのために頑張ろう！」と新鮮な気持ちで学級経営に取り組んできました。校務分掌は児童会担当や体育主任など、毎年同じような分掌を務めていました。しかし、教職に就いて10年が経った時、自分はこのままでいいのかと思うようになりました。そのきっかけは、高校の同級生との再会でした。その同級生は保険会社に勤めており、私の知らない社会の話をとくさん

さて、今回、私が教職大学院に入学するきっかけは、昨年度この大学院を修了されましたさくら認定こども園園長の伊藤康弘先生です。伊藤先生と私の園の理事長との繋がりの中、このような学びの場があることを教えていただきました。また、同じく昨年度修了された和田こども園園長の嵩谷浩太郎先生にも大学院で学ぶ上での様々なアドバイスをいただきました。ご両名方の園や同じように大学院で学んでいる福井佼成幼稚園の先生方は、すでに保育教諭が学ぶためのコミュニティづくりを意欲的にされています。先日、さっそくこれらの園の先生方の学びあいの姿を勉強させていただく機会をいただいたのですが、私にとって、すでにとても大きな刺激になっています。今後も様々なご縁を大事にしながら、2年間、大学院で多くのことを学んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

知っていました。私は社会科の教員ですが、教科書に書かれている内容は知っていても、世の中のことについては知らないことばかりだと気付かされました。

「教員は世間知らずだから」とよく言われますが、まさに私がそうでした。そして、自分がすごく狭い範囲の中だけでしか動いていないことに、将来の自分への危機感を持ちました。それと同時に、「もっと視野を広げて、幅広いスキルを身に付けていきたい。そのためには、さまざまな人と関わり、さまざまな経験を積んでいきたい」と考えるようになりました。学校業務で言えば、担当学年や校務分掌は今まで担当したことのないことを、毎年、校内人事の希望として伝えました。ありがたいことに、さまざまな校務分掌を経験させていただくことができました。学校外の機関や団体が行っているイベントなどにも積極的に参加し、他業種の方との繋がりも増えました。

現在、私は岐阜市立草潤中学校に務めています。本校は、昨年4月に開校した不登校を経験した児童・生徒を対象とした不登校特例校です。「学校らしくない

学校」というコンセプトと「ありのままの君を受け入れる新たな形」をキャッチフレーズに掲げています。登校スタイルは、毎日登校、週に数日登校、家庭学習を基本とした登校など、自分でスタイルを決めます。全ての授業をオンラインでライブ配信をしているので、教室だけでなく特別教室や自宅など、どの場所でも学習しても良いことになっています。また、他学年の授業にも参加可能で、一日中絵を描くなど、好きなことに没頭することもよしとしています。生徒は、1日の学習内容と場所だけでなく、担任も選べるようにしています。途中で変更することも可能です。通知表の形式も三者面談で決定します。5段階評価、記述式評価など、教科によってカスタマイズできることになっています。校則、制服、給食、掃除の時間、行事はありません。生徒たちが必要ということならその都度、話し合って決定していく仕組みとなっています。昨年度は、生徒たちから「全校みんなで旅行に行きたい」という声があったので、生徒の有志で計画・準備を進め、旅行に出かけました。生徒たちの心身の安定を図るために、校内にはさまざまな工夫をしています。テントやハンモックなどが置かれた、ゆったりくつろげる図書室。卓球台やランニングマシンで体を動かしたりゲームで遊んだりできるアクティブルーム。ピアノ、ギター、ドラムなど多くの楽器が置かれたミュージックルームなど、生徒が安心できる空間や居場所を作っています。これまでの学

校では、生徒が学校に合わせるスタイルでしたが、本校では学校が生徒一人ひとりに合わせる形をとっています。

これまで勤務してきた学校とは真逆の学校ということもあり、開校初年度は戸惑いもたくさんありました。「授業はどうやって進めればいいのか?」「最低限の校則は必要なのでは?」「いろいろなことが自由だけど、甘やかしているのでは?」など、自問自答を繰り返し、毎日のように職員同士で話し合っていました。「感受性が豊かでとても繊細な生徒と関わるときにも、どんな言葉を使って声をかければいいのか。」「1人である生徒に声をかけたら、実は声をかけて欲しくなかった。」など、良かれと思ってしたことが生徒の負担になることも何度もありました。これまで培ってきたスキルが通用せず、私の中に沁み込んでいる教育感や指導感を180度変えていかなければならない一年となりました。

開校2年目は、学校のスタイルに少しずつ慣れてきましたが、毎日、試行錯誤の連続です。生徒のために何か取り組もうとすると、学校らしい学校に近づいていってしまうことも課題の一つとなっています。教職大学院での学びの時間や出会いを大切に、日々の実践を省察しながら、「ありのままの君を受け入れる新たな形」を求め続けていきたいと思っています。

「ただいま戻りました」の挨拶に代えて

中野 麻委 なかの まい



お久しぶりです。私が福井大学教職大学院にお世話になるのは、実は2度目になります。一言でいえば「出戻り」です。今回は、なぜ私が福井大学教職大学院にもう一度通おうと思ったのか、そのいきさつを自己紹介に変えてお話ししたいと思います。

最初に福井に通ったのは、福井駅前がまだ更地の頃、平成27年のことでした。当時勤務していた板橋区教育委員会が福井大学教職大学院と協定を結ぶことになり、指導主事4年目となる自分が派遣されることになったことがきっかけです。それまで、どうやら上層部で何かしら福井県との交流を進めているようだ、と漠然とした情報は入っていましたが、まさかそれが直に自分に降りかかってくるとは当時思ってもいませんでした。唐突に「来年、指導主事を福井大

に派遣する」と上から話があった時、おそらく、その場にいた指導主事全員が思ったと思います。「・・・どうか、自分ではありませんように」。

指導主事の仕事は激務です。なかなか集まらない調査、回収した調査票の内容の確認、迫りくる都の締め切り、それなのに時間のかかる提出前の決裁、そんな時に限ってかかってくる苦情の電話。明日の研究授業の指導講評の資料がまだできていないのに、気づけば時計は夜の9時、10時なんてことはざらで、学校訪問などで1日庁舎を空けると、机には山のよう書類が積まれている・・・そんな状況なのに、これから毎月1回福井県まで行かなくてはならない。一体誰にそんな余裕があるというのか。そういうわけで、「じゃ、中野さん、よろしく」と指名された時は、「・・・ハイ」と苦笑いするしかありませんでした。

「福井の子どもの学力が高いのはなぜか」「板橋区に来年完成する教育支援センターの在り方を探ってきて」「教科センター方式ってどんな感じ？」等々、福井行きを免れた周囲は好き勝手に疑問を投げかけます。区の税金で派遣されるという自覚はあったので、一つでも多く吸収して帰ってこようという使命感はありましたが、教職大学院に入学する前に参加したラウンドテーブルでは、「実践の語りを傾聴する」というスタイルに「・・・ナニコレ？???」。想像していた教職大学院での学びとは全く異なり、上司に福井のことを報告しようにも、学んだという実感がなく非常に困惑しました。忙しい中、万年寝不足の身体に鞭打って福井まで通い、帰りの新幹線では頭の中が真っ白になるほど疲れ果てて東京に戻る。毎回その繰り返しで、私は何のためにここにいるのか、というか、なんのために通わされているのか自分でもよく分からなくなっていたように思います。

そんな中、転機になったのは夏の Cycle で読んだ『コミュニティオブプラクティス』でした。この書籍を読んで、教職大学院での学びを通して目指すところが見えてきたように思います。また、自分の学びを区のエデュケーションにどのように還元できるか、おぼろげながらイメージができてきたのもこの頃でした。人の実

践を聞いた時、指導主事特有の「指導をしたがる癖」がようやく抜けはじめ、異なる立場の人の実践を聞くことを面白いと思えるようになっていきましたが、次の年、私は教職大学院の2年目を迎えることができませんでした。福井での学びを通して所属していた教育支援センターで行ってみたいアイデアもいくつか浮かんでいましたが、実現することは叶いませんでした。妊娠、出産に伴い指導室を去ることになったからです。

その後、学校現場に異動し、すぐに産休、育休に入りそこから4年間のお休み。この間は仕事のことも、福井でのことも忘れ、とにかく子育てで中心に家に閉じこもっていました。その後、令和2年の4月に職場復帰するとともに、副校長へ昇任・現任校へ異動をすることになりました。3月31日まで「おしめ&ミルク」の専業主婦だったのに、4月1日になったら「副校長」。パソコンを触るのも電話をとるのも久々なのに、職員室に入ったら「副校長」。4年間社会から離れている間に、世の中は元号が変わり、コロナ禍になり、学習指導要領が変わり…まるで浦島太郎です。

そこで、教育から離れていた4年間の空白を埋めるべく、令和2年度、3年度とNITS主催の研修を受けることにしました。コロナ禍のため全てオンデマンドでの研修だったので、何度も繰り返し聞くことができ、知識としては十分に身に付けることができました。でも、知識を身に付けると今度は実践が聞きたくなります。そこで何かよい機会はないかと、ふと思い出したのが、福井でのラウンドテーブルでした。あのような取組がどこかで行われていないか探していたところ、東京都から送付されてきたのが「福井大学連合教職大学院東京サテライト校」のチラシでした。人間とはよくできているもので、辛かったりしんどかったりした思い出は記憶から薄れやすいようです。気づいたら問い合わせのメールを送っていました。

そんな経緯で、今、自己紹介の文章を打っています。振り返りながら当時の大変さを徐々に思い出しましたが、それでもなお、再度福井大学教職大学院の門を

くぐったのは、きっとその苦労を差し引いても余りある学びがそこにあったと当時の自分が認識したからでしょう。何はともあれ、これからの新たな出会い

を楽しみにしつつ今回はしっかり最後まで通いきりたいと思います。皆様、恥ずかしながら戻ってまいりました。また、どうぞよろしくお願いします。



福嶋 大晃 ふくしま ひろあき

学校改革マネジメント
コース2年履修1年目、
丸岡南中学校 教諭 福嶋大晃です。

私は、今年度 PTA 庶務・地域連携の担当として、丸岡南中学校スクールプランの「学びのフィールドを拓く PTCA (Parent Teacher Community Association)」を主に担当し、研究課題としている。

直近の研究の状況について、今、大きく動いているのは、「地域の祭り(磯部地区・明章地区・鳴鹿地区)」を通した地域連携活動。今年度は、「地域の祭り」を実施することが決定し、各地域で準備が始まった。

コロナ前、中学生は「地域の祭り」にボランティアとして参加していたが、部活単位で顧問が引率して参加する仕組みだった。つまり、自分の住んでいる地域でない「地域の祭り」のお手伝いを、強制的にさせられる仕組みだった。そこで、家庭・地域・学校協議会で、「今年度は生徒が自分の住んでいる地域の行事に主体的に参加できるような仕組みができないか考えています」と提案すると、地域の方は「地域の祭りへの生徒の参加について、先生が引率するのではなく、地域の大人に任せていただきたい。部活動単位で参加していただいてもよいが、他の地域の生徒もいてやりにくい、と感じていた。自分の地域の子どもが、自分の地域の行事に参加できるようにしてもらえると助かる。先生は来なくて結構です」と賛成していただいた。新しい仕組みを作っていくことになった。

“生徒が自分の住んでいる地域の行事に主体的に参加できるような仕組み”を成功させるためには、共々委員(ボランティアの推進を担当する委員会の生徒)が、「地域の方が必要と考えている人数のボランティアを集めることができるか」ということが最大の課題となる。そこで、共々委員長・共々副委員長(2名)の3名と、給食の時間に集まって、ボランティア募集について何度も打ち合わせを行った。3名がボランティアを必要人数集めるために、まず3名でボランティアに参加するとどんな良いことがあるかを詰め込んだチラシを作る、次に各クラスの共々委員がチラシを使ってボランティア募集の説明をする、止めに共々委員長が全校放送でボランティア募集の呼びかけを行う、という流れを作り出した。

共々委員長・共々副委員長(2名)の3名が作ったチラシには、食事券がもらえるなどの特典以外に、生徒にとっての地域連携の意義について書かれていた。それをまとめると、「生徒が地域の人と一緒に活動する→地域の役に立つことができる→自分の住んでいる地域が活性化することを実感する→地域の大人との交流が深まり、助けてもらえたり、協力してもらえたりする→大人とのコミュニケーション能力が上がる→地域の大人に知り合いが増える→生徒が自分の住んでいる地域を好きになる→地域に支えられる学校になる」と私が考えていたより、生徒は地域連携を深く考えていた。表面上だけで地域連携を考えている私より、真剣に地域のことを考えている3名を頼もしく感じ、生徒から学ぶ、生徒と一緒に学ぶ、その重要性を改めて感じた。

各クラスの共々委員がチラシを使ってボランティア募集の説明をする、共々委員長が全校放送でボランティア募集の呼びかけを行う、と予定通り行った。ボランティア参加希望者は「参加したい」と私のところに言いに来ることになっているので、待った。その結果、次々と参加希望者が集まり、必要人数の2倍近くの生徒が集まった。必要人数を少し超えた時点で締め切ったが、この結果には驚かされた。生徒の力は、

共々委員(ボランティアの推進を担当する委員会の生徒)が、「地域の方が必要と考えている人数のボランティアを集めることができるか」ということが最大の課題となる。そこで、共々委員長・共々副委員長(2名)の3名と、給食の時間に集まって、ボランティア募集について何度も打ち合わせを行った。3名がボランティアを必要人数集めるために、まず3名でボランティアに参加するとどんな良いことがあるかを詰め込んだチラシを作る、次に各クラスの共々委員がチラシを使ってボランティア募集の説明をする、止めに共々委員長が全校放送でボランティア募集の呼びかけを行う、という流れを作り出した。

すごいと実感した。共々委員長・共々副委員長（2名）の3名が、どのように工夫したらボランティアが集まるか真剣に考えた結果で、新しい仕組みを成功させるための最大の課題を達成することができた。このことを地域コーディネーターに伝えると、大変喜んでくださった。今週末の「地域の祭り」が楽しみである。「先生は来なくて結構です」と言われたが、様子を見に行きたい。

これで、3つの「地域の祭り」のうち1つ目のボランティア募集を終えた。共々委員長・共々副委員長（2名）の3名が作り出した新しい仕組みは、成功したと言える。残り2つの「地域の祭り」のボランティア募集でも、新しい仕組みを試行する。実は、2つ目のボランティア募集が始まっているのだが、問題が発生している。それは、2つ目の「地域の祭り」に吹

奏楽部の演奏を企画しているため、吹奏楽部の生徒がボランティアとして参加しにくい点である。この地域の生徒で吹奏楽部に所属している生徒の割合が大きい。顧問に参加できるように配慮してもらえないかと頼むが、演奏の準備・後始末のことを考えると無理なようだ。しかも、生徒の話を聞くと「1回行ったことがあるけど、おもしろくなかった」と衝撃的な話をしている。それでも必要人数のボランティアを集めることができるよう、共々委員長・共々副委員長（2名）の3名と相談している。

大学では上のように、丸岡南中学校のPTCA活動について振り返りをする中で、よりよい活動に改善しながら、自分自身が成長していきたいと思っている。よろしくお願いします。

丸山 高弘 まるやま たかひろ

はじめまして。今年度より2年間、連合教職開発研究科学校改革マネジメントコースでお世話になる丸山高弘と申します。4月からおこなってきた合同カンファレンスで得た気づきをもとに、これまでも振り返ってみたいと思います。

私は現在、母校の鯖江市東陽中学校に勤務しています。母校に勤めることができると知ったとき、なんだかうれしくなりました。思い出深い校舎や体育館。あのころの思いが今によみがえってくるようです。

学校の先生になりたいと考えたのは、中学生のときでした。当時の私たちといっしょになって学校行事や部活動に真剣に向き合ってください先生。そんな先生の姿にふれ、憧れを抱きました。ところが、勉強が得意だったわけでもなく、高校や大学への進学、そして教員採用試験では、たいへん苦勞しました。理解するのに人一倍時間がかかるという点と、これはいうまでもないことですが、勉強不足だった点是否めません。苦手なことに時間をかけて取り組むというのはたいへん勇気のいることです。そんな勉強を苦手としている私が、教職大学院に入学したのはなぜか。

一つは、学ぶことの楽しさを経験したことが大きく影響しています。いくつになっても新しい知識や考えに触れることがとても楽しい。専門教科である国語科の学びもありました。部活動で長年携わっているバスケットボールでの学びもありました。依然としてコロナの猛威は収まりをみせませんが、唯一良かったことは、オンラインでの学びができるようになったことです。地方にいながらにして全国、全世界の方々とも意見を交換できるようになりました。なんと喜ばしいことでしょう。そのような経験が、教職大学院で学んでみたいと思うきっかけの一つになりました。

また、学校現場が大きく様変わりを始めているのを目の当たりにし、今までの価値観ではこの先やっていけないのではないかという危機感があったことも事実です。そう思ったときに、教職大学院という学び直せる場があるとお聞きし、ぜひとも通ってみたいと強く思いました。定年が65歳に引き上げられるようです。私に残されたあと20年間という教師人生の中で、子どもたちや地域

社会にどのような貢献ができるのか、この2年間でヒントを得たいと考えています。

「学ぶ楽しさ」、たいへん短い言葉ですが、勉強が苦手な私が学んでみようという気持ちになるまでには、さまざまなことがありました。特に大きく影響したのは、部活動での指導がうまくいかなかったことでした。いっしょになって目標に向かって活動してくださる先生に憧れて目指した教職の道。しかし、自分にはそのような力がないのではないかと、なかば自分自身に失望していました。ところが、同じ学校の先輩に、迷子になっている私にいろいろと声をかけ教え導いてくださった方がいました。「言われるままにやってみよう」から始まり、「教わったことを生かして〇〇はできないか」と考えが変わってきました。何より、そうすることで生徒の心を感じ取れるようになってきたのです。いわゆる「主語を自分ではなく相手にする」ということができるようになったのでしょうか。そのように考えられるようになって初めて「教師」として子どもの前に立つことができたように思います。それからは、さまざまな方の意見に耳を傾け、時間が合えば直にお会いしてお話をお聞きしてきました。子どもたちとの関係もうまくいくようになりました。部活動では結果こそ出ませんが、生き生きと活動する生徒が多くなったように感じます。このような経験から、学ぶことの意義、その学

びを活かした実践をすることの価値を、身をもって体験することができたように思います。また年長者として、若い先生たちが困っていたら手を差し伸べられるようになったら、私を助けてくださった方々への恩返しにもなるかもしれません。

昨年度、生徒指導主事という立場で校則改正に取り組みました。強く感じたのは、私たち教員と社会との認識の差です。また、教員の中でも考えが大きく異なっているということにも気づくことができました。経験年数の長い先生ほど保守的傾向があることがわかりました。しかしながら、それは当然のことです。生徒をうまく管理しなければ学校としての機能を維持できない時代をくぐり抜けてきたという自負があるはずです。その点に敬意を払いつつ、社会の新たな要請に応えていくべきだと考えます。その部分について、教職員、生徒、保護者が一体となって合意を形成する過程を大切にできる学校が、これからの時代に求められる学校だと思います。

まとまりのない文章になってしまいましたが、これからは今までと違った形の学校があってもよいのではないのでしょうか。そのような学校を作り上げるのは、教職員、生徒、その保護者を含めた地域社会です。そうするために、今の学校がもっている強みは何か。反対に足りないものは何か。教職大学院での学びを活かして実践を深めていきたいです。

宮谷 郁江 みやたに いくえ

今年度から学校改革マネジメントコースに入学しました、宮谷郁江と申します。よろしく願いいたします。現在私は岐阜市立徹明さくら小学校に勤めています。徹明さくら小学校は、2つの学校が合併し、新しくできた学校です。今年で6年目となりました。私はここに勤務して4年目になり、今年度は研究主任、及び5年生の学年主任を務めています。

これまで、小学校4校、中学校1校で20年間勤務しました。その中で私は教師として何度もくじけそ

うになったこともありましたが、人や環境に恵まれたことが、教師としてこれまで勤めてこられた理由ではないかと思っています。

初任校である美濃加茂市立山手小学校では、悩みを共有できる同期の仲間、そして、リードしてくださる学年主任の先生に出会いました。うまくいかない生徒指導や保護者対応に、「自分だけではない」という安心感や、受け止めてくれる仲間がいることの安心感が、そのときの私を支えていました。また、その

仲間は、一緒に高め合えるよきライバルでもありました。その3年間で、同士で高め合える「教師という仕事」の楽しさを経験しました。2校目の岐阜市立長良東小学校は、専門教科で個人研究テーマを掲げ、研究を進める学校であったことから、出会った多くの先生方から、教材研究の大切さを学びました。子どもを育成するために、教師は授業とどのように向き合うかを徹底的に叩きこまれた3年間でした。理科専科である私が、理科学習の面白さを実感したのが、この3年間でした。3校目の岐阜市立岐阜西中学校では私は、初めての中学校を経験しました。ここでは、小学校と中学校の違いに悩んだと同時に、生徒指導の大変さを目の当たりにしました。学年で共通理解しながら、学年職員で一丸となることの大切さを学びました。学年主任の先生、生徒指導の先生が第2の担任のように私を支えてくださったことは、今の私の学年主任としての在り方に大きく影響しているように思います。

そのあとに勤めた岐阜市立柳津小学校では、その後半で、初めて学年主任、そして研究主任を務めることになりました。これまで、主任の先生、先輩の先生に聞いたり、真似したりしながら、その後を必死に追いかけるような気持ちで教師をしていた私が、自分より若い先生方が増え、逆の立場になったのです。さらに、学習指導要領の改訂に加え、小学校理科研究協議会全国大会の会場校という重責が私を押し潰してしまいそうでした。しかし、学年のことや研究のことを共に考え、共有していける同士が存在しました。学年主任としても、研究主任としても未熟で、多くの失敗もしましたが、私と共に研究について考え、意見を交わし合い、高め合えた仲間ができました。研究を協働して高め合えたのがこの学校であったと思います。

そして4年前、徹明さくら小学校へと異動しました。徹明さくら小学校に勤めるようになり、新学習指導要領の全面実施、コロナウイルス感染症の流行、働き方改革、20代の先生の増加……。様々な環境や状況の変化がありました。そして自分の年齢や立場とともに、私にとってこれまでの自分が当たり前としてきた教師の在り方や、子どもたちの学び方をこれまでと同じようにし続けることが正しいのか迷いが生じたり、疑問をもったりするようになりました。さらに、教師としての自分自身の成長だけを考えていた自分から、「主体的に追究し合える教員集団になるにはどうしたらよいだろうか」と全体のことを考えるようになっていました。しかし、自分はどうかすればよいか、何ができるか、何が足りないのかが見え、漠然とした不安と、自分の至らなさを抱えるようになりました。ちょうどそんなときに、校長先生から福井大学の教職大学院のお話をいただきました。

今年度は、これまでの合同カンファレンスの中で、こうした自分の歩みや悩みを語ることで、「自分が何を大切にしてきたのか」を改めて見つめ直す機会をいただいています。また、同じ立場の先生や、全国各地の先生方の実践を聞いたり、自分の話をしたりする中で、刺激を受けながら、自分の実践をふり返ったり、新たな視点を学んだりしています。6月のラウンドテーブルの中での「教師の学びが子どもの学びになる」という言葉が心に突き刺さりました。子どもたちに「主体的・対話的で深い学び」を求めるなら、教師自身がそのように学ぶことが求められている。私自身も、そんな学びができるように省察を繰り返していきたいと思います。

そして、ここでの学びを、学校をよりよくしていくために生かしていきたいと思います。さらには、自分の教員としての成長につなげていきたいと思います。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

「役割」に対する意識の変化

授業研究・教職専門性開発コース 3 年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

高島 伊吹

大学院生活も 3 年目となり、既に半年が経とうとしている。大学院での生活も年を重ねるにつれて 1 日 1 日が早く感じる。今年に入り、何か大きな変化があったかという、それほど大きな変化はないが、多くの同期が修了し、経験を共にした仲間がいなくなり、同期という存在の大きさを日々感じている。

インターンシップでは、新しく 7 年生（中学 1 年生）の担当となり、学級のメンターの先生も変わり、また新たな気持ちで先生や生徒と関わっている。金曜カンファレンスでは M3 となり、企画・運営からはずれ、M2、そして新しく入学した M1 と共に学びを進めている。

インターンシップでは新しいクラス、金曜カンファレンスでは、新たに M1 が入り、立場的にも少し変化があった。私自身、環境が変わると、初めに考えることが自分自身の「役割」である。これまで、様々な組織に所属し、様々な役割を担ってきた。正直、過去それほど自分自身の役割というものを深く考えたことはなかったが、大学院に入学してからは、それを意識する 때가多くなったように思う。しかし、過去にもそれをかなり意識していた時期がある。それは、高校生時代の部活動である。私はバスケットボール部に所属していた。2 年生当時、私は同期からの推薦もあり、部長に選ばれた。今までクラスや応援団など、まとめる役を担っていたこともあり、苦手意識は特になかった。しかし、部長になってから、部活に行くのがだんだんと嫌になっていったのを覚えている。私自身特別上手なわけではなかった。また、威厳のある性格でもなく、うまくチームをまとめている自信

もなかった。今振り返ると、私自身が勝手に理想の部長像をつくり、その理想になれない自分に対して劣等感を感じていたのだと思う。正直、部活を引退するまで部長になって良かったと思う日はなかった。しかし、引退後、後輩からは「先輩と部活することが楽しかった」「先輩は部活に対して真剣ですごかった」などの声をもらい、そのとき自分自身が気づいていなかったものに気づかされた。自分の理想の部長にはなれなかったが、部長という役割は十分に担っていたのかなと思う。

大学院に入学して、最初に役割というものを考えたのは、インターンシップのときである。中学校の現場を初めて経験した私にとって、自分が先生になるというのは未知であったため、悩まされたことを今でも覚えている。先生として、しっかり生徒に教えないといけない、しっかりと生徒を指導しなければいけないなど、ありもしない「理想の先生像」をつくり、理想像を追い求めていたと思う。転機が訪れたのは、1 年目の教育実習生の補助に入ったときである。私は先生と生徒の関わりしか目にすることはなかったが、教育実習生と生徒の関わりというものを見た。期間の短さというものもあるが、皆フランクに接しており、仲良くなろうとする姿勢が見られた。それを見て、私自身、生徒との関わり方を見つめ直し、「理想の先生」を演じることをやめた。そうすると、生徒から「先生、なんか話しやすくなった。前と雰囲気違う」と言われるようになった。

今までの経験を通して、私は、部長はこうあるべき、先生はこうあるべきなど、勝手に理想像を作り出し、

そんな存在になろうとしていたように思える。しかし、今改めて考えてみると、部長や先生など、役割というものはあつてないようなものであり、自らつくっていくものではないかと思う。私自身が、この組織の中で、どうなっていきたいのか、関わる人と、どのように関係をつくっていきたいのか、その2つを考えていくことが大切であると思うようになり、あり

もしない理想像や責任というものが自分からなくなり、良い意味で楽に考えることが出来るようになった。

今後も、様々な組織に所属し、そのたびに役割というものは変化していくと思うが、この考え方を大切にしていきたいと思う。

岐阜の週間カンファレンス

授業研究・教職専門性開発コース2年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

古田 悠人

私たちストレートマスターは週に一度、「週間カンファレンス」という授業があります。福井では金曜日、岐阜では木曜日に行っています。私たち岐阜拠点は今までストレートマスターがいなかったということから昨年のスタートは右も左も分からない状態でした。この週間カンファレンスはこういった力をつける時間なのだろうか、どんなことを話したらいいのだろうか、とビジョンが持てていない状態でした。最初は大学院の先生にまかせっきりで我々の主体性もありませんでした。そこから、二週間に一度、福井とオンラインでつないで週間カンファレンスに参加したり、岐阜でのカンファレンスの回数をこなしていくことで週間カンファレンスがこういったものなのか明確になっていきました。特に、当時のM2の先輩の運営会議の様子は我々にとって新鮮なものであり、ここまで学生で考えるのかと衝撃的なものでありました。このような姿が私たちの道しるべとなっていきました。

夏休みが明けた後期からは岐阜拠点のメンバーでそれぞれやりたいことなどを積極的に話し合う場面が増え、やっと学生主体の週間カンファレンスになっていきました。我々に必要なことは何か、どんな力をつけなければならないか、このようなことを半年近く議論し、試行錯誤し年度が変わった4月によりやく岐阜の週間カンファレンスの形が定まりスタートしました。議論をする中で、私たち岐阜のメンバーは「教科の力」に課題があると感じていました。その

課題を解消するために、岐阜のカンファレンスでは専門教科の力を伸ばすべく、教科の中にある課題を自分で見つけ出しその課題を解消していく研究を始め、自分の研究について発表する時間を持つことにしました。このような時間を持つことによって、他の教科の視点を取り入れることが出来たり、自分一人では生まれてこなかった考えなどを聴くことができ、非常に学びの質は高いものであると感じています。

私はこの研究の時間で社会科におけるユニバーサルデザインを取り入れた授業作りというテーマで話をしてきました。自分なりに学会誌や論文を読んで自分の授業実践と繋げようとしたが、うまく結びつかず四苦八苦している時期がありました。そんな時に、週間カンファレンスで、私がやりたいことは誰でもわかりやすいと思える授業づくりなのではないか、そうであれば、まずユニバーサルデザインという手法ではなく、社会科の内容を突き詰めた方がいいとアドバイスをいただきました。そのことをきっかけに私は最終的にはユニバーサルデザインを取り入れていくが、まずはわかる授業にするために社会科における「資料のあり方」を再度勉強し直そうと思えました。この週間カンファレンスは自分の困り感を感じ取り、自分のやるべきことを共に考えてくれるそんな時間であると強く感じました。

私たちが修了すると一学年下の後輩は1人になってしまいます。修了するまでに、さらに週間カンファレンスが良くなるよう試行錯誤を重ねていきたいと

思います。この岐阜のスタイルが確立し、規模が大きくなるよう我々が土台をしっかりと作り上げていきたいと思います。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

学びの枠組みの捉え方

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立若狭高等学校

大橋 夕紀

教職大学院2年目の年も7月に差し掛かり、あっという間に夏のサイクルを迎える時期だ。勤務校は今年から前後期制になったため、夏休み前に「1学期が終わる」とは言わないが、体感的には一息入れて4月からこれまでの取り組みを振り返り、9月からに活かせるように整理する季節だ。

今年度は10年ぶりに担任を外れ、SSH研究部という部署で、主に教科「探究」の仕掛けに関わらせてもらっている。この部署への異動を希望したのは、昨年度から教職大学院で学ぶ中で、探究の運営に関わりたいと感じるようになったからだ。これまでもクラス担任として、英語科要員として、国際探究科や普通科の探究の授業に入ったり、教科「探究」の先にある生徒の自発的な校外活動に彼らと共に参加したりしてきた。この経験から、探究は生徒の資質能力を大きく伸ばす助けになると気づいた。今年度、自分が主担当として探究に携わることで、これまでの位置では見えてこなかったものにも出会えるだろうと考えた。現在、普通科2年生の探究Ⅱ（文系）の授業の主担当として探究の運営に関わっている。主担当として意識していることは、以下の3点だ。

- ①限られた時間の中でチームの先生方と生徒の情報や進め方を共有し、1時間ごとの目標や、中長期的なゴールを確認、シェアすること。
- ②①が自然に全体でできる仕組みや環境を整えること。

③探究活動の様々な場面で、私たち教員側（外部講師の先生方も）の得たことや感じたことを、生徒に前向きな言葉でフィードバックすること。チームの教員誰でもが同じようにこれができること。その仕組みを作ること。

このニュースレターの題名を「学びの枠組みの捉え方」とした。教員も生徒も探究を仕組みとして上手く使うことで、お互いに学びに前向きになれる自分が真にどうありたいかを考えるきっかけになる。つまり、自分の「枠組み」を変えるきっかけになる。「自分が真にどうありたいか」を常に考えられることは、ブレずに学び続ける力に繋がっていて、この力が答えのない問いに対して主体的に考え行動していくためには必要だと考える。探究のおかげで、我々教員も生徒も「学ぶ枠組み」を柔軟にとらえ、これまでの枠組みをぶっ壊すことのできるきっかけをもらい、意識しているかどうかは別として、「真にどうありたいか」を考える力が身に付いてきているのではないだろうか。

教職大学院での学びも「学ぶ枠組みの捉え方」を考え直す大きなきっかけになっている。昨年度から、月一度のカンファレンスや夏・冬のサイクルで、語り合い、聴き合い、もう一度これまでの自分の取り組みを様々な角度から見ると、確実に自分の中の何か、周囲との関係が変わり始めている。私の中のこれまでの学びの枠組みがぶっ壊れつつあり、学びとはもっと自由でワクワクするものだと感じるようになって

きている。言い方は乱暴だが、探究の手法と教職大学院での語り合い、聴き合いながら省察していく手法はほぼ同じだと感じている。変化は緩やかだが、确实

に広がっていつている。それを日々感じている。今年度、後半の半年の中でもまだまだそんな変化を目にして感動していけることが楽しみで仕方がない。

学び続ける教員を目指して

ミドルリーダー養成コース2年/町田市立武蔵岡中学校

内村 佐保莉

教職大学院に入学してからあっという間に1年が過ぎ、2年目が始まりました。毎月のカンファレンスや集中講座で地域や校種を超えて多くの先生方と語り合ってきた大学院での時間は、多様な考え方に触れることができ、とても刺激的で大変貴重です。今まで自覚できていなかった自分に気がついたり新たな実践を紹介していただいたりとても充実しており、色々な先生方や実践との出会いが今の私を支えているのだと痛感しています。大学院での学びのおかげで、視野や見方・考え方が広がってきました。中でも一番の変化は、自分自身とじっくり向き合い省察し、自分の言葉で表現するという経験をしたことです。これまでの教員人生において、これほどわが身を振り返り真剣に教職について考えたことはありませんでした。今までの私は、自分自身と対峙することを避け、見たくないものには見えないように蓋をしてきました。しかし省察的实践を大切にしている大学院では、見たくないものから目をそらすのではなく、きちんと向き合うことが求められます。おかれている立場や状況、不安や困難などを俯瞰的に捉え直すことで、自らを冷静に客観的に捉えることができました。実践を語り合うカンファレンスは、自分事として語れるものなど何もないと特に苦手に感じていましたが、聞き手の先生方に助けられ引き出されいただき、懸命に考えて拙いながらも言語化することで、少しずつ、今まで大切にしてきたことや大事にしていきたいことなどが見えてきました。

私が所属している学校は、小学1年生から中学3年生まで9学年の児童・生徒が同じ校舎で生活している施設一体型の小中一貫校です。先日のラウンドテーブルでは、一昨年度から研究主任として携わっていた校内研究の内容を報告しました。全学年が単

学級の小規模校ですが、様々な児童・生徒がいます。昨年度までの研究では、子どもたちの自己肯定感を上げ、次への意欲を抱かせるべく研究主題を設定し、他者と関わりながら学ぶ協働学習と基礎的基本的な学習内容の習得につながる個別学習について協議し学校全体で取り組んできました。市の研究指定を受け推進してきたこの2年間は、決してよいことばかりではありませんでしたが、その時の葛藤や先生方の反応も含めてラウンドテーブルで報告できたことで、グループの先生方の共感や「ヒントをいただきました」という言葉をいただくことができ、とてもうれしく思うと同時にこれまでの歩みに自信をもつことができました。そしてこの実践報告を通して、自校の取組を客観的に捉え、学校としての成果や課題、歩んできた研究実践と、研究主任である私自身の成果や課題をきちんと分けることができました。

毎月のカンファレンスでは、不安や難しく思っていることを語ると解決に向かうヒントや勇気をいただくことができます。悩みを打ち明けると悩んでいるのは自分だけではないのだと思うことができ、うまくいった瞬間を話すと、自分事のように一緒に喜んでくれます。共に悩んだり考えたり喜んだりしてくれる仲間をくださった大学院での出会いと時間は、本当にかげがえのないものです。そして、子どもたちに協働的な学びを推進するように、私たち教員もまた、協働の中でこそ学びが深められるのだと実感しました。

今年度の本校の校内研究は、学級会に焦点をあてて実践を積み重ねていく計画です。昨年度までの協働学習・個別学習はもちろん継続的に実践しながら、より豊かな人間関係を構築できる児童・生徒の育成

という主題のもと、“他者は自分と異なる考えをもっている”ということを認識したうえで、互いの合意形成を図ることができる児童・生徒を目指します。何をするにも人は一人では成し得ません。大学院での学びで私自身が実感したように、子どもたちや先生方にも、他者と関わり協働する機会によってより豊かな関係を築くことができるのだということを実感してもらえるような校内研究を進めていきたいと思っています。

大学院生という環境での学びも後半に差し掛かり、長期実践報告の時期が近づいてきました。自信をもって語れることは多くはありませんが、これまでの歩みをきちんと振り返って価値付け、省察し、自分の言葉でまとめあげたいと思っています。研究指定校としての期間が終わったから…校内研究のめどがたったから…というネガティブ思考ではなく、研究指定や校内研などに関わらず、常に周囲と関わり学び続け、「何のために」「どうして」そのような活動を取り入れるのか、その活動の意義から考えられる教員になりたいと強く思っています。

Classroom Observation in ALT's perspective

ミドルリーダー養成コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程 ALT

Virna Christine Tancio

A Roundtable session is a bi-annual event of DPDT, the University of Fukui that invites people, teachers in Japan, and from other countries. It provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education. There is more time for the speaker to share, discuss and speak about their practice compared to monthly conferences. In this study cycle, members are also engaged in the discussion and therefore, it brings the people together.

For this year's Summer Roundtable Sessions, I was asked to prepare for Poster Sessions and for Sunday's International Roundtable Presentation. It took me a while to decide on the concept or the theme for my presentations. In the end, I decided to continue on with the lesson study I had last year. For both presentations, the theme was *"The Impact of Classroom Observation in Improving the Relationship of JTE and ALT in Creating an Effective English Class"*. Usually when ALTs have observations, it is when our performance in schools is evaluated. It could either be someone from the Board of Education or from a staff of the dispatching company who will choose a day to

come to one of your classes. In this case, they will observe how ALTs would interact with the students and how they have taught the lesson for that day if they have followed the teaching standards for ALTs and the activities prepared for the class. Sometimes, it is more subjective than objective because everything would depend on whether they liked what the ALT did or not. From that experience that led to some negative assumptions, the words "classroom observation" somewhat scares me. There was hesitation after of course, but I learned that classroom observation can be an invaluable source of data about the actual practice of teachers, including their strengths, areas for improvement, and needs for professional development. What was my aim? What motivated me to accept the offer? Personally, I wanted to know whether I'm still doing good as an ALT, and if not, what are the areas that need improvement; how to be a better ALT for the school. What did I learn from it? Nothing is to be scared of when it comes to classroom observation. It helps to have extra eyes and see the interactions within the class. It leads to a better understanding as we try to reflect on what has happened in

the class. Involving the observers in the class also gave more opportunities for the students to use the language with other people aside from their classmates. We had the chance to hear the students' conversations. As for the teachers, we were given an avenue where we can both listen to each other and collaborate in making the lesson

plans for our classes. The observation was the first step for both of us in improving our working relationship. In the future, it would be a great honor to join a classroom observation. The experience had a good impact on me, my JTE, the students, and our next classes.

「ピンチはチャンス！」これ、本当です！！

学校改革マネジメントコース2年/敦賀市立沓見小学校 夢田 昌代

昨年度まで、私の対話の大部分の相手は子どもたちだった。対話の場所は教室。対話の始めの言葉は「夢田先生、あのね〜」。

今年度は、対話の大部分は教員である大人と。その場所は職員室。話し始めの言葉も変わった。「教頭先生、よろしいですか」。そう、私は4月から教頭職を拝命し、生活が一変した。教員生活史上最大のピンチが訪れたのだ。

ピンチである理由（本当はもっとある…）

- ①教頭への心の準備は0%！
- ②同じ市内にある学校なのに、行ったことがある回数 は1回だけ！（はじめの挨拶に行った時はナビを最大限有効活用）
- ③M1として1年間取り組んできたことは100%無になるのか！？

私は昨年度、福井県で初めての施設一体型小中一貫校として4月にスタートした角鹿小学校に勤務していた。新校舎での1年間、授業づくりを柱に子どもたち同士の交流を通して教員同士の対話を深め、協働を図る取組を行った。次のサイクルでは「小・中の協働を生むカリキュラムづくり」を推進していきたいと考えていた。なのに…。

複雑な思いで、新しい生活が始まった。毎日、いや、一瞬一瞬が「？」と「！」の連続である。これまで以上に、いや、教員生活史上最大限に「対話」を大事にしていこうと決めた。「？」や「！」を声に出すと、不思議なことが起きた。どこからともなく返答があ

るのだ。「昨年度は…」「私が知っていることは…」「それはA先生がよく知っています。聞いてみましょうか」と。私の「？」が解決に向かう。私の「！」が「！！」に変わっていく。

この不思議で心地良い状況はなぜ起きているのか考えてみた。1つ目は、職員室の机の配置だ。昨年度のRTでの北川善樹校長先生の発表から、職員室の机の配置が協働を生むことを学んだ。沓見小学校の職員室は「コの字型」。常に全員の顔が見える。真剣な表情、困った表情、迷っている表情。サインや声を拾い合うことが自然にできる。ああ、職員室の机の配置が協働を生む、とはこのことだったのか！2つ目は、自分を振り返ってみると、よく分からないことは何でも教頭先生に尋ね、指示を仰いできた。“教頭先生頼み”の姿勢があった。しかし、今私の目の前にいる先生たちは、これまでの私とは違っている。「自律」している。ああ、自律した教員集団とはこのことだったのか！

このように考えると、昨年度学んできたことは無にはなっていないことに気付く。無ではなく、100%有効に活用していけるのではないか。昨年度より小さなコミュニティだからこそ、“やってみたいこと”が“できること”になるのではないかと考えた。

そこで私は、先生たちとの対話のきっかけづくりとして「JD 通信」なるものを発行しようと思った。先生たちと教職大学院での学びを共有したいという思いで、記念すべきNo.1は令和の日本型教育についてのクイズ。No.2はその解答。只今No.15までたど

り着いたが、授業を見せてもらったお礼の手紙（授業のいいところいっぱい、改善点を少し記したもの）だったり、教頭研修日記（ピンときたキーワード紹介）であったり、私の思いを伝える重要なアイテムになっている。特に授業を見せてもらったお礼の手紙は好評で、研究主任からは「教頭先生、2通目のお手紙、ありますよね。待っています」と、早くもリクエスト

をもらっている（校長・教務主任・研究主任には、先生たちみんなへの手紙を渡してある）。

「ピンチはチャンス！」よく言われる言葉であるが、私は身をもってそう感じている。今、私は教員生活史上最高のチャンスをつかんでいる！



月間カンファレンス/ラウンドテーブルだより

ラウンドテーブル ニュースレター

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市立明新小学校 魚見 晏那

2022年度になって初めてのラウンドテーブルは対面での開催でした。今までは新型コロナウイルスの影響もあり、オンラインでの開催で、県内外問わずさまざまな先生方や子どもたちと話せる良さもありましたが、少し話辛い面もあり、オンラインの良さも感じつつ、少し辛さも感じていました。去年はオンラインでの開催がメインであったため、オンラインが普通となっていました。しかし、今回のラウンドテーブルでは発表者の表情だけでなく、聞き手がしっかりと目を見て聞ける良さを感じました。また、雰囲気の良い良さも大きいと思います。オンラインでは開始前にミュートをして会話する機会が少なかったですが、対面では開始前にグループ内で少し話してからセッションに入るという話し合い前のやりとりが私の中ではすごく大きかったです。

1日目は Zone A「学校/インクルーシブ」に参加しました。午前中のセッションでは、探究学習の実践とコロナ禍での実践についてお話を聞きました。先生方が子どもたちの良さや主体性を引き出しながら、新たなことに挑戦していく実践を聞くことができました。

午後からのクロスセッションでは、探究学習について話し合いが行われました。グループでは、自分た

ちが受けてきた探究学習から今求められる学習との違いや探究学習を行う上で重要になる声かけや発問などを話し合い、すごく学びのある時間となりました。

2日目は昨年と同様に聞き手として実践報告を聞きました。3人の先生の報告をお聞きして、子どもたちの居心地の良い場所が学校となるために部活動や授業、施設のつくりなど学校としての取り組みやお便りやビデオを作るなど先生としての取り組みを行っていることを知りました。

私自身、こんなに学校がさまざまなアプローチをしてくれることはすごく嬉しいことであるだけでなく、先生ってこんな視点で見ているんだと先生を知るきっかけにもなったと感じました。そして、セッションの中で“リーダーの必要性”についての話題があり、中学校では肩書だけになってしまうのではないかと話がありました。確かに、子どもたちの中でリーダー＝肩書というイメージがあると思います。しかし、リーダーがいるからこそ、特に小学校はクラスや班活動など、さまざまなコミュニティが形成されるのではないかと考えます。リーダーとして、巻き込む存在というのは校種によって在り方

が大きく異なるため、自分の捉え方について考え直す必要があると感じました。

今回のラウンドテーブルでは”学校の取り組み”についてさまざまな方法を知ることができました。私

自身、それらはすごく良いものや取り入れることが可能なもの、不可能なものさまただと思います。自分や子どもたちの現状や実情を含めながら必要かどうかを判断する必要があると思いました。

6/18(土), 19(日) 6 月ラウンドテーブル

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

揚原 佑

今回のラウンドテーブルではこども園、小学校、中学校、高校の色々な教科の先生や大学教員、刑務所の教育部門の人など、多種多様な立場の方々と語り合う中で自身の理論を再構築していくというか、教育観を考えられたのは良かったように思う。

まず1日目シンポジウムでは風越学園という幼少中の混在校で、「12年を通した学びで森に囲まれ、自然から学ぶような探究の仕方」を大事にしている。例えば毎日午前中は散歩の時間を確保しており、その際に鹿の角が両方落ちていた。それにより子どもたちから博物館を作りたいという想いが生まれて、そこから探究が始まる。レイアウトはどうするか？何を展示するか？BGMはどうするかなど各個人が個人探究していく中で自分達の博物館を作っていく。そうしていく中で領域に関しては教科横断的な学び方が出来そうであること、そして大人にとっても興味・関心があるということなどが相まってプロジェクトが進んでいく。子どもの中には、もちろんその輪に入ることが難しい子も存在する。しかしその子の強みを把握して、活かせるところを大事にして、関わり手が、促していくことで意外と乗り気になって活動をするようになったということが話されており、教師は改めてファシリテーター(活動の促進者)であるべきであると感じた。それは決して容易に出来るものではなく、常に子どもの強みや興味・関心、状況の把握など様々なフィルターを通して、子どものことを理解していく必要があると感じている。

そして小林真由美先生の前任校の至民中学校での実践においては自分自身も昨年度まで在籍していたので、どのようなプロジェクトがあったのかはある程度理解していたが、知らないことが多かった。まずコロナ禍において様々なことが制限される中で総合的な学習において子どもたちに自分たち自身で、コロナのことを調べてルールを作成したり、修学旅行に関しても自分達で決めたりした。そうした中で自分達で様々なものを作り上げていく中でコンピテンシーが育まれていったという話がされていた。附属ではごく当たり前に子ども主体で色々な活動がされているが、やはり公立校ではそうではない。しかしそうした中で民主主義の担い手として必要な資質・能力を育てていった実践には自分自身も学ぶことが多かったように感じている。

そして後半の話し合いでは、福井県立聾学校の教頭である常廣先生、教職員支援機構の岡本先生、奈良の高校の美術教員である佐藤先生の3人と話した。その際に話し合っていて面白かったのは、シンポジウムでも話されていたが立ち話などインフォーマルな場での語り合いに学びが多くあるということである。教職員は生徒の学びを支えていく上で、やはり協働が求められる。その際に教員同士の連携を生む中で子ども観、教育観など様々なことを話し合い、共有知を作っていく必要があると思う。そうすると「対話」が重要である。しかし教頭先生という立場上話しにくかったり、美術科として多様な教科の先生と協働して教科横断的な授業をやったりもしているが、その輪に巻き込むことができない教科の先生もいた

りする。そんな中で重要なのはやはり「対話」であるということ話をされており、こうしたラウンドテーブルのような場の設定が学校現場では重要なのだろうと感じた。

2日目には刑務所職員、こども園の先生、教育学研究科のドクターの院生など多種多様なメンバーと話し合った。

自分の中で「理科をなぜ学校で学ばなければいけないのか?」、「理科ではどういう力をつけていく必要があるのか?」という理論的な部分がまだ深く理解しきれておらず、土台がぐらついている状況である。やはり理論は自分、そして生徒にとっての物差しであり、指針としても必要なものであるという話を

した。そして理論だけでなく、自分自身が大事にした理想というのと同様に重要であるという話があった。学習指導要領として、培う必要のある力はもちろんある。そんな中で自分として副次的に付けたい力も勿論ある。理科という教科を通して、培うことの出来る資質・能力は何か、今後社会を生き抜く子ども達にとって、少しでも支えになる力は何かは今後も考えていく必要があるように感じている。岐阜聖徳の福地先生にも大学院生の今のうちに勉強しておくことももちろん大事だが、今後教員人生においてさらに追求していく必要があるという話もお聞きした。まさにその通りだ。今後も多くの人と対話をする事を通して、子どものために自分自身の資質・能力を向上していければと考える。

対話に支えられ、対話から学んだこと

ミドルリーダー養成コース2年/さくら認定こども園 原田 久実

昨年教職大学院に入学して早くも1年が過ぎ、いよいよ長期実践報告に向けて気持ちをシフトチェンジしていかないとはいえないと思いつつ、まだまだテーマも定まらない状態です。気持ちだけが焦り正直不安もあります。だからこそ、今一度自分のこれまでを振り返ってみました。

これまでの実践の歩みと教職大学院で学んだこと

昨年から主幹保育教諭をさせていただき、クラス担任をしていた時とは仕事の内容が1クラスから園全体に変わり、各クラスのサポートや保護者支援、園行事の段取り、園内外の環境作り、職員間の風通し係等、想像を超える仕事の広範囲に驚きました。又クラスの担任をもてない寂しさもあり仕事が苦しいと思う日もありました。しかし、教職大学院のカンファレンスで主幹の仕事の悩みを打ち明け、様々な職種の先生方の話を聞き対話をする中で自分の中の視点が広がり重荷が軽くなったのを思い出します。自分一人で仕事をしてきたのではない、さくらの職員や(さくら認定こども園の事をさくらと書かせてもらいました)保護者の方や地域の方々に支えていただいて

いたことに気づくことが出来ました。その気づきも教職大学院での対話からの学びがあったからこそだと思います。

保護者の方に「先生はどのクラスなんですか?」と聞かれ「各クラスのお手伝いに入っています」と答えると「良かった〜うちの子も見てもらえるんですね」と言って頂き、自分は全園児の子を見れるんだと前向きになれました。自分はいろんな人に支えてもらっている!自分も周りの人を支えたい!と思いました。あつという間の教職大学院1年目でしたが、「協働」の意味やあり方を学び、さくらの中での自分を捉え直せる1年だったと思います。

他者の意見からの学び

今年から森田に姉妹園が開園して職員も約半数入れ替わりがありました。先日森田さくらへ手伝いに行くとき新副園長先生に「さくらのやり方についてちょっと言わせてもらいます」と今までさくらでやってきた事について、ご指摘がありました。頭からその問題が離れず、どうしたら良いのかもわからなくなってしまうました。指摘されたのは、「朝登園後の子

ども達が行う活動や活動場所について」のことでした。さくらは、登園後9時までは2歳児～5歳児は晴れている日は園庭へ出て、雨の場合はホールで好きな遊びをしています。0歳児と1歳児は部屋の横のテラスで好きな遊びをしています。0,1歳児のテラスは園庭が見えるので大きいクラスのお兄さんやお姉さんを「何しているのかな?」と興味を持って見たり、反対に大きいクラスの子達が0,1歳児の子を気にかけて、声をかけてくれる様子が微笑ましいと思っていました。私達職員が異年齢児交流の場や時間を設けなくても、自然と子ども達同士で異年齢交流ができていて、私自身も9時までの活動はこのスタイルが子ども達や職員どちらにとってもいい時間だと実感していました。しかしながら、「異年齢児であるため担任が把握しにくい」「何故各年齢ごとに室内で遊ばないのか」「新人の先生達もどう子ども達を見ていいのか混乱しないのか」という副園長先生からのご意見、ご指摘だったのです。

今まで当たり前に9時までの異年齢児の子ども達を見ていましたが、この時間の子ども達のあり方を考えてみる事にしました。さくらに戻り園長先生や同僚とも話をしている時に福井大学の松木先生の「異質な他者との対話こそが深い学びにつながる」とのお言葉を思い出しました。以前の私だったら他者との対話に対し避けてしまい結論をすぐにでも出そうとしていたと思います。この時間の子ども達は登園してすぐにエンジンがかかる子やエンジンがかからない子と様々であり、遊びをすぐに見つけられる子もいればぼんやりとしている子もいます。だからこそ、異年齢児の中でもその場につく職員は子ども一人一人に対して丁寧にに関わり、気づきや思いを子ども達と共有し、職員同士でも共有する場なのではないか、この朝の自由時間があるからこどもは9時からの活動にも戸惑うことなく自然な流れで入るのではないか、という当たり前の見直しができたのです。

自分の中にその問題を落とし込み、自園でリフレクションすることで間違いに気づき、良さを再認識することもできました。いきなり指摘を受けるとシ

ョックが大きかったですが、もう一度捉え直しができたのも他者との対話から当たり前に過ごしていた子ども達への関わり方が明確になったのも、教職大学院での先生方との対話のおかげだと強く感じ、感謝の気持ちで一杯になりました。

子ども達の対話から学んだ対話の面白さ

3歳児のみんなの時間（振り返りの時間）の事例

今年3歳児の振り返りの様子を見にいくと、丸く円になって友達同士の顔が見えるように座り、担任のY先生が司会となって始まっていました。自園は振り返りの時間に気持ちカードを使用しています。Y先生はみんなの時間の気持ちカードを手に持ち「お話



したい子いるかな?」と聞くと、S君がはい!と手をあげてうれしいカードを選び「僕は今日、園庭で黄色いバイクに乗れたので嬉しかった～」と話をしました。Y先生は「黄色いバイクが好きなの?」と質問すると、「赤いバイクが本当は好きなんですけど壊れていて乗れないから」と答えました。すると「そうそう!赤いバイク壊れてるの」「ハンドル曲がってるの」「変になってるの」とバイク愛好家の子ども達が次々に教えてくれたのです。そしてもう一度Y先生は「赤いバイク壊れているんだって～S君教えてくれてありがとう」と言うとS君はとても満足そうな顔で座りました。

自分の意見が尊重されS君の自信につながり、自己評価にも繋がっていると思いました。又、S君の意味付け価値づけになっていると感じました。そして3歳児は言葉の発達の差がある為、Y先生のようにゆっくりと丁寧に代弁したり復唱することで子ども達の理解が深まり語彙の獲得にもつながると思います。

その後Y先生は「先生もひとつやさしいカードをあげたいお友達がいるの。聞いてくれる?」と話し出

すと、みんなが真剣に Y 先生の方を向きました。ゴロゴロと寝転んでいる子も真剣に聞いています。「今日、Y ちゃんが泣いているときに、M ちゃんがどうしたの？だいじょうぶ？と声をかけてくれたので M ちゃんにやさしいカードをあげたいです！」と M ちゃんにカードを渡すと、M ちゃんは物凄く嬉しそうににっこりと笑いました。Y 先生が子ども達に寄り添い見ていたからこそであり、子ども達がいきいきとした振り返りだったと感心しました。

子ども達の可能性を引き出す対話は難しいですが、この日の 3 歳児の対話は面白く次へと繋がっていると確信した場面でした。

これまでも振り返り、どの場面でも対話があると思います。そして「協働」するには必ず「対話」が必要であり、対話からの学びから実践を通して、もっと深め、長期実践報告に書き留めていきたいです。

＜文脈＞の境界線を超えて「学びをつむぐ」場としての ラウンドテーブル

学校改革マネジメントコース 2 年/保善高等学校 三保谷 遼

いまでこそ国語教育における協働・探究的な学びや、コンピテンシーに注目した学び、そしてそれを支える教師の変容や力量形成といった（おこがましい言い方になるが）教師教育に関心を寄せて、勤務校でのささやかな実践に挑んでいる稿者だが、福井で学ぶようになるまでは、熱心な（そしてつまらない）ある種の〈追っかけ〉だった。もっとも〈追っかけ〉といっても、芸能人の熱烈なファンとしての意味ではない。稿者が熱心に〈追っかけ〉していたのは大学入試だった。もちろん、大学入学後の学び（いわゆる初年次教育の領域）や社会につながるような学びに対する関心もなかったわけではないし、できる限り心を寄せていた自負はある。しかし、やはり入試問題をドグマのように絶対視して、そこで求められる〈学力〉とメノマエの子どもたちの〈学力〉をいかに架橋していくのか、ということが稿者の関心のなかで最も大きな領域を占有していたことは否めない。つまり、高校教育を大学入試のために矮小化して捉え、（皮肉な言い方になるが）大学入試を最大の目標とする逆向きのカリキュラム設計観が、福井で学ぶ前の稿者の教師としての〈文脈〉を規定していたといえる。

しかし、幼保小中高といった学校はもとより、さまざまな組織に所属する人びとが一堂に会するラウンドテーブルでは、そのような〈文脈〉を相対化せざるを得なくなる。ラウンドテーブルの末席を汚すようになって何年か経ったが、初めのころの稿者は、そのような〈文脈〉の相対化をめぐる苦しんだ記憶がある。いわば、〈追っかけ〉としてのアイデンティティをひとまず解体して、教育に携わる者としての視野を広く構築しなおすこと、金子奨先生のことば¹を借りれば「内／外の、日常／非日常の境界線を越えて」、「別様の自分もありうることへの感受」という「脱自的な経験」としての学びを、稿者は福井で、そして幾度かのラウンドテーブルで重ねてきたのだといえる。では、稿者の〈追っかけ〉としてのアイデンティティはいかに解体され、教育に携わる者としての視野はいかに再構築されたのか。今の段階の仮の答えのようなものを書き連ねてみたい。

ラウンドテーブルでは多種多様な校種・職種における実践が語られる。学校、地域、福祉、医療……それらの実践をつなぐ脈絡などまるで存在しないかのように感じられることもあるかもしれない。だが、そ

¹ 金子奨（著）『学びをつむぐ（協働）が育む教室の絆』（大月書店・2008 年）

ここで語られるさまざまな年齢や立場、組織の〈文脈〉のなかにある子どもたちや大人たちの学びの諸相には〈文脈〉の違いを超越した共通項がある。一例を挙げるならば、今回のラウンドテーブルでは（稿者の関わった範囲においてのことではあるが）、さまざまな〈文脈〉のなかに身を置く教師たちが多様な実践を出発点にしつつも、結果として一様に「見通しを立てる力」というコンピテンシーにつながるような気づきを語っていた。このような〈文脈〉を超越した学びの諸相に触れることで、大学入試という狭い〈文脈〉の外にある、オーセンティックな〈学力〉観へと稿者の関心の領域が開かれてきたといえる。

いわば、人が人と関わり合うなかで、よりよい学びと育ちがどのように展開されていくのか、自らの日常の〈文脈〉を越えた視野を獲得して、より長いスパンで教育そのもの（あるいは学びそのもの）を捉えかえすという学びを稿者はラウンドテーブルで経験してきた。いわば 15 歳から 18 歳の子どもたちの学びと育ちから、人そのものの学びと育ちへとパースペクティブが開かれていったという意味で、「高校教師」ではなく「（無印の）教師」としてのアイデンティティを稿者はラウンドテーブルを経て形づくってきたといえる。また、今回のラウンドテーブルでも様々なところで耳にしたことだが、教師の学びと子どもの学びは相似形をなすという。そのような新たな〈文脈〉のなかに身を置いてきたからこそ、教師の変容や力量形成といった、いわば教師教育をめぐる問題に関心を寄せている現在の稿者があるのかもしれない。

たとえ 3 歳の子どもだろうとも、15 歳の少年少女だろうとも、25 歳の青年だろうとも、良質で深い学びが実現されるときには、（この点はうまく私のことばで言語化する手立てが見つかっていないが）必ず通底する本質があると感じられてならない。そうしたエッセンスを丁寧に捉えて言語化し、稿者がいま関わっている子どもたちの良質で深い学びの実現につなげていくこと。そして、良質で深い学びに通底するエッセンスの見取りを、稿者の大切な同僚たちの（教師としての）良質で深い学びの実現につなげていくこと。あと何度、ラウンドテーブルの末席を汚すことになるのかはわからないが、そのような使命感のもとに新たな〈文脈〉を〈追っかけ〉ていくとともに、より広く世の中の〈文脈〉を〈追っかけ〉、子どもたちと大人たちのより広い学びにつながるような実践を展開する教師としての力量を形成していくための省察の場として、さらには、教師教育に関心を寄せる者として「個人として改善しながらチームのパフォーマンスを高め、専門職全体を通して質を高めることⁱⁱ⁾」につながるような学びの場として、ラウンドテーブル、そして福井での学びをつむぎつづけていきたい。

i 金子奨（著）『学びをつむぐ 〈協働〉が育む教室の絆』（大月書店・2008 年）

ii アンディ・ハーグリーブス、マイケル・フラン（著）、木村優、篠原岳司、秋田喜代美（監訳）『専門職としての教師の資本 21 世紀を革新する教師・学校・教育政策のグランドデザイン』（金子書房・2022 年）

実践研究福井ラウンドテーブルを振り返って 「新たな教師の学び」を支える協働のために

学校改革マネジメントコースM2/敦賀市立東浦小学校 堀川 和宏

話題提供（実践的提案）

福井県小浜市小浜第二中学校長 加福 秀樹 先生

平成 29 年度からは教頭として、令和 2 年度からは校長として小浜第二中学校の学校改革・学校運営に関わる実践の紹介がとても参考になった。加福先生は、福井大学教職大学院での学びを校内研修に取

り入れ、それまでの校内研修の在り方を一新。具体的には、教職大学院の少人数での学び「カンファレンス」を取り入れたことが、教職員全体の主体的・対話的な研修につながり、結果的に「スクールプランを達成できたか」という学校評価の質問に対して「できた」と回答する教職員が年々増加していったことや、学校が落ち着き、生徒は「学校が楽しい」保護者は「子どもを小浜二中に通わせてよかった」という声を、数多く聞くことができるようになったと振り返られていた。カンファレンスの在り方も、令和2年から令和4年まで、形（メンバー、テーマ）を変えたり工夫したりを繰り返しながら改善していった苦労話や成功話が参考になり、自分の勤務する学校においても実践してみたいと感じた。

教職員支援機構理事長 荒瀬 克己 先生

「人は学ぶ意欲をもって生まれてきている」「人は学ぶことを通して成長する」といった言葉や、探究を軸にして、教師が「単に教える」から、子どもが「深く学ぶ」へ転換することが必要という話が印象に残った。また、「子どもが学び合う学校」は「教師が学び合う学校」であり、学びを取り戻す、創る研修が大切であるといった内容が参考になった。

午後からのポスターセッションでは、2名の中学生の発表を聞くことができた。一人目が、新潟県の中学生の発表で、同じクラスの生徒の進路や就職希望について「地元がよいか、都会がよいか」のアンケートを行い、そう答えた理由やどういった回答が理想的なのか模索している様子が伝わってきた。

もう一人の発表は、永平寺中学校の生徒が、地元永平寺のよさ・魅力といったものを、どのように発見し、どのように外に向けて発信していったらよいかを、三国町や大野市など他の街から学んでいる姿に感動した。二人に共通して、自分たちの生まれた地域のことを真剣に考えている姿や、大人の中に混ざって、自分の意見を堂々と発表できる姿に驚かされることばかりであった。

Zone A 21世紀の学びを実践する教師のコミュニティを培う

—多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探る—

<シンポジスト>

軽井沢風越学園 教諭 片岡 利允 先生

まず、風越学園は私立の幼小中の混在校、各学年20人ほどの学校で、12年間かけて「学ぶ」→「遊ぶ」→「 」になる、三つ目はそれぞれの学び手によって変わる学習テーマを掲げ、プロジェクト学習を探究している学校だということがわかった。そこには「先生」という存在はなく、「あだ名」で呼ばれている「スタッフ」という存在があり、子どももスタッフもわくわくしながら探究学習に取り組む姿があった。また、中には興味を示さない子どもも現れるが、その子どもの意図を汲みながら、いかに集団の中心的な流れをつくっていけるか考えるスタッフの実践を知ることができた。

福井大学連合教職大学院教授（前至民中学校校長）
小林 真由美 先生

福井市至民中学校は、2008年度に「教科センター方式」「70分授業」「縦割り活動」などの特徴を備えた新しいタイプの学校として開校した学校であったが、時が経つとともに生徒の実態とのずれが生じ、学校がスムーズに運営できない状況になっていた。2019年に同校の校長として赴任し1年近くが経った頃、コロナ禍による一斉休校に直面する。臨時休校中は、生徒を「管理」する方向へ針が振れそうになったが、教職員の中で話し合いを重ねていく中で、大切なのは「監視」することではなく「心配」すること、「遠距離恋愛のように思いを伝え、絆をつなごう」といった働きかけのこいもあって、6月の学校再開の日には、不登校ぎみだった生徒も含め全員が元気に登校したという話をお聞きした。その時私は、中学校の3学年主任を務めており、高校受験の直前であり、卒業式も控えている大事な時期の臨時休業期間をどう過ごすべきであるか悩んだ時であり、小林先生の気持ちに共感できた。手紙や電話、学級通信や学年通信で生徒たちのことを「心配」しながら卒業式当日を迎えたが、2年間の学年主任を務めた期間の中で、初めて学

年生徒全員が出席し、全員が体育館で（別室ではなく）卒業証書を受け取るという感動的な式となった記憶が蘇り、至民中学校での出来事が身近に感じられた。

また、コロナ禍の中、「至民型キーコンピテンシー」と呼ばれる「表現力」「判断力」「集団力」「行動力」「社会力」の5つの力の育成を目標にして、「感染症対策を通して社会と関わる」を総合的な学習のテーマに展開していった実践をお聞きし、「自分たちのルールを自分たちで考える」「生徒の力で学校を動かす」至民中学校の生徒たちの素晴らしさ、またその力を引き出している先生方の素晴らしさ、生徒・教職員の力を引き出している校長先生の学校経営力に驚かされた。コロナ禍だから「できる」ことをする、管理職に必要な資質、学校を経営しているのは生徒といった小林先生の考え方・発想すべてが勉強になり、今後の自分の働き方や考え方の目標を見つけることができた。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

Future Lab 代表 七島 貴幸 先生

2011年の東日本大震災の復興事業として始まった、「OECD 東北スクール」という活動について話を聞かせていただいた。「OECD 東北スクール」は、被災地の中高生を地域復興の担い手として人材育成をするプロジェクトで、パリから東北の魅力をアピール

するために、「過去を超える、常識を超える、国境を超える」経験を積み重ね、現在は、国や地域、世代を超えて繋がり、世界中の知恵を結集させて社会問題や教育について考えている。他のネットワーク拠点とも繋がり、アップデートしていきながら進めているといった活動を初めて知り、まず活動のスケールの大きさに驚かされた。

中学生の視点から福島によさ・魅力を再発見し、観光プランを制作したことが実現された取組や、福島の高校生たちが、2018年より高校生フェスティバルを展開していった取組、小学生が考えた「思わず食べなくなるストックできないご当地非常食」の開発とデータベース化といった取組など、どの話も子どもたちのアイデア・発想がユニークでおもしろく、また活動に対する気持ちの粘り強さ、力強さに驚かされるばかりであった。全ての活動に共通して、プロジェクトを構成する中心が子どもや生徒であり、その周りが先生、その周りが市や大学、そしてその周りが文科省やメディアというふうには、「子どもを主語」として、周囲が支援している構造であった。人と人が繋がるときに、「他人を頼る力」と「頼られる力」と聞いて誰と誰の関係を想像しますか？といった話から、お互いにお互いを忙しいと思っていて、繋がってみたいからお互いに頼りたいけれども遠慮していたことが分かったというエピソードなど勉強になる話をたくさん聞くことができ、元気をいただいた。

地域と交流することで得るもの

授業研究・教職専門性開発コース M2/岐阜聖徳学院大学附属中学校

岩瀬 夢有人

今回の月間カンファレンスでは、午前の時間には五十嵐先生のお話を聞き、午後では生活科「あそぶものをつくろう」の実践記録を読んだのクロスセッションを行いました。今回のカンファレンスでは、「地域との交流」というキーワードが良く出てきました。五十嵐先生の実践では、地域の方との交流の実践を話してくださいました。五十嵐先生の学校では、地域の体操教室の方たちと児童が交流し、児童たちがい

ろんな体操を考えて、それを体操教室の高齢者の方に教える活動をしていました。この話を受けて、「ゴールを決めるとそれ以上はない。枠を決めないことで未知の世界を創り出せる。」や「学校だからこそしなくてはならないという考えは、大人（教師）だけでなく子供（児童・生徒）も思っている。これが不自由ということ。そのため、小学1、2年生は担任の先生

がきちんと見るが、小学3、4年生からは自由にしてい
いく。ことを学びました。

午後からは生活科の「あそぶものをつくろう」の実
践記録を読み、クロスセッションをしてみて、子供の
興味・関心を引き出すために、レールのないものの取
り組みをしていかなければならないことを学びまし
た。レールのある学習をしたところで、教師は楽で確
かな授業はできます。見通しももてるため、スムーズ
な授業展開やトラブルにも臨機応変に対応すること
ができます。しかし、授業1つにしても主役は生徒で
す。生徒に学びはあるのかということを教師は考える
必要があると私は思います。毎年同じような体育
をしても、もちろん生徒はつまらないですし、飽きが
やって来ます。それでは、生徒の興味・関心は引き出
せません。レールのない授業をすることで生徒もい
つもと違う、面白そうという興味・関心がわいてくる
のだと思います。生徒自身から湧いてくるその興味・
関心を教師が引き出すためには何をしていこう。前
年度とは変えたものを作っていこうという気持ちが
大切なのではないかと思いました。

また、授業のなかで失敗させないようにという心
遣いが、生徒には良くないことに気付きました。失敗
させないような授業では、何もうまれず、成長があり
ません。失敗を経験し初めてそこで教師のアドバイ
スをする。こうすることにより、生徒も挑戦するチャ
レンジ精神をつき、成長に繋がっていくのだと学び
ました。

「幼児教育ではゴールがない」ということを改めて
考えさせられました。幼児教育では枠組みもなく、や
りたいことを子供自身で行っていく。失敗すればど
う改善すればいいか自分で考えていく。時には、自分
のやっていることがうまくいかず、思い描いた道を変
えることもある。でも、それがゴールのない自由な
ところだと思う。午前の部でもあったように、中学校
では枠組みというものやゴールが決まっていた自由
ではなく「不自由」になっている。自分の授業ではこ
の自由でゴールのない授業を目指し、私自身、試行錯
誤を繰り返し生徒のために自分も成長していけたら
なと思います。

今回の月間カンファレンスでは、地域との交流の
話も多くあり、今インターンに行っている学校では
ありえないような話をたくさん聞くことができました。
自分のインターン先の学校では、私立ということ
もあり地域との交流がほぼありません。そのため、生
徒が成長できるはずの機会もなく、自分は皆さんの
話を聞いていてつらくなりました。実際、今の学校で
は自分もインターン生であり、学校を変えるような
力はありません。しかし、少しでも地域のことを知る
であつたり、自分が来年度就職する公立学校でのこ
とを考えて、皆さんの実践を記録するなどして、自分
自身のこれからの成長のためにも、地域との交流に
ついては考え続けていきたいと思っています。



ラウンドテーブル報告/感想

6月のラウンドテーブルの各 Zone の参加者からの感想文を掲載しています。

Zone A

福井ラウンドテーブル 2022・Summer Sessions (Zone A) に参加して

福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程 西村 智裕

昨夏に引き続き、今夏も Zone A 学校「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培うー多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探るー」に参加させていただいた。昨年は学級担任をしていて、実際に学級内に“困り感”を持つ子どもがおり、その子どもを如何に学級内で生き生きと活動させるか、如何に周りの子どもたちに受け入れてもらえるかということに私自身が困っていたので、少しでも参考になる実践があればと、すぐるような思いで参加させていただいたのを記憶している。

今年は学級担任ではなく、専門教科で色々な学級に出入りしているが、どの学級にも少なからず課題を抱えている子どもはいる。「協働探究」を学びの柱にしている本校にとって、良好な人間関係を築きにくい子、言葉が出ず他者とうまくコミュニケーションが取れない子（場面緘黙）、こだわりが強すぎてグループ活動ではいつもうまくいかない子（発達障害かも）などの学びを如何に保証するか。授業の中で指導者が子どもの様子をしっかりと見取り、それに対してどのような手立てを講じるかが重要である。今回は、そのような視点を持って参加させていただいた。

まず、前半のシンポジウムでは、鹿の角が落ちているような豊かな大自然の中でプロジェクト型学習を進めている軽井沢風越学園の取り組みと、コロナ禍で様々な活動制限がある中、生徒のアイディアと先

生方のサポートでコロナ以前以上の主体的活動に取り組み、学校を一つにまとめ上げた福井市至民中学校の取り組みをお聞きした。風越学園は私立ということもあり、教員を「スタッフ」と呼ばせたり、カリキュラムの面で独特な部分が見受けられたりしたが、子どもの興味関心を大切にして探究テーマを作っていることや、気がかりな子の得意な部分をうまく活動と関連付けて集団に受け入れさせていること（「個 Labo レーション」から「Co Labo レーション」へ）など、先生方の授業作りや見取りのスキルの高さに大変感銘を受けた。また、至民中学校の「SWSP（至民わくわくスタートプログラム）」という取り組みは、あくまで「生徒主体（主語は子ども）」というご報告ではあったが、生徒の思い（愛校心）に精一杯応えようとした先生方の組織力と、『みんな一緒に 1 枚の絵を描く』という指導理念に心から感動させられた。「コロナ」という未知の困難に対して、大人としてただ子どもを守るというスタンスではなく、子どもと“共に”立ち向かっていく、本当に素敵な関係性だなと感じた。

後半のクロスセッションでは、東京の学生さん（院生）の質問等に我々附属義務教育学校の教員や市町の幼稚園の先生が答える形で、和やかに話し合いが進められた。自分の実践を一方的に語るだけでなく、学生さんの純粋な質問にお答えしたことで、改めて自分のこれまでの取り組みを振り返ることができた。

私の学び～Zone Aを通して～

独立行政法人教職員支援機構

和田 庄平

ラウンドテーブルという言葉は、以前から聞いていたが、今回初めて参加した。いろいろな刺激を受け、今までの自分を振り返り、たくさんのことを考えた。執筆の内容は、参加してみての感想ということだが、私自身の学びの振り返りとして書こうと思う。

私が参加した ZoneA は「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」というテーマで行われた。開始15分前。どきどき・わくわくしながら講義室へ入ると、セッションⅡのグループ名簿があった。ファシリテーターの方を入れて4人。時間は80分。長い。そんなに何を話すのかと困惑しながら、セッションⅠの開始を待つ。

セッションⅠは、「多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校づくり」ということで、軽井沢風越学園の片岡教諭と前至民中学校校長の小林教授の実践発表だ。両者とも、子供を見とり対話を重ねながら、子供を真ん中にして実践に取り組んでいることが伝わってきた。そして何より教師自身が楽しみながら試行錯誤している様子を伺うことができた。生き生きとそして熱く子供の様子をお話される二人の実践を聞きながら自問した。私は、本当の意味で子供たちに向き合ってきたのだろうか。同僚と協働し、私自身が探究的な学びをしていたのだろうか。振り返ると失敗を恐れ、決まりきった形で物事を展開してきた。その枠から外れそうになると指導をしてきたし、自分自身をも修正してきた。集団の流れに合うように指導をしてきた私にとっては、「いかに個から集団の中心的な流れをつくるのか」「個を集団の渦のスタートにできているか」という言葉に、胸が締め付けられて苦しくなる。と同時に、何事にも好奇心を持って生き生きと取り組んでいる子供たちの様子を見たいという気持ちが込みあげてくる。自分に足りないことは何だろうか。そのために必要なことは何か。そんな思いを抱きながら、セッションⅠを終えた。

セッションⅡは、セッションⅠに基づき実践を共有するグループ協議の時間だ。グループの1人が対話について話をした。「なるほど」と感心しながら聞いていると、ファシリテーターの方が「対話ってなんで必要なのでしょう。」と問いかける。今までの取り組みを振り返りながら考えを伝えてみた。伝えている最中にふと気付く。私に足りなかったことは「見とる力」と「認めること」ではないかと。そして「見とる」「認める」ためには、様々な視点や見方が必要になる。だからこそ、対話や協働が大切なのではないかと。問いかけとはズレているし、自分に足りなかったことを話すのは気が引けたが、まとまらないまま、思いを伝えてみた。一通り皆で話をした後、ファシリテーターの方が「気付きがすごい。そういったことに気付く、悩むこと自体が成長している証だ」と3人に対して声を掛けてくださった。やはり、認められると気持ちがいいものだと思えてきた。その後も、今までの取り組みを振り返る度に、なぜ、そのような言動をしたのかを考える視点をくださったし、言動を価値付けてくださった。当初長いと感じていた時間はあっという間に過ぎ、まだまだ足りないと思えたほどだ。グループの方には、話したい欲が収まらない私に終了後もお付き合いいただき、ご迷惑をおかけした。

自分を振り返ることは苦しい部分もあったが、周りの人が認め、価値付けをしてくださったことで、安心して振り返ることができたし、今までの実践から新たな考えをもつこともでき、なんとも心地よい気分になった。次回が楽しみで仕方がない。余談だが、頭を使うということはこんなにも疲れ、お腹がすくものなのか。おかげで、福井の名物をたくさん食べることができた。

Zone A に参加して学んだこと

福井大学教育学部 2 年 青木 愛一郎

Zone A では、「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う～多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探る～」というテーマのもとに、まず、軽井沢風越学園の片岡利充先生と福井大学連合教職大学院教授(前至民中学校校長)小林真由美先生の実践を拝聴した。

軽井沢風越学園の片岡さんからは、発見をとにかくするために、あてもなく歩き続ける授業内容において、鹿の角を見つけて、そこから「博物館」を作り上げることにした実践についてのお話が印象的だった。授業を展開するにあたり、教師の熱意が大切であり、生徒たちに対して背中を見せるくらいの勢いで指導していくことが大切であること。「個」をコラボレーションさせて「集団」を作り上げていくことが大切であることなど、とても内容の濃いお話を伺えて、有意義な時間だった。

次に福井大学連合教職大学院教授(前至民中学校校長)の小林先生からは、至民中学校がどのようにしてコロナ渦を乗り越えたかについてのお話がとても印象的だった。コロナウイルスが流行する前の至民中学校では「異学年縦割り方式」として合唱コンクールなどで異学年と一緒に歌うような至民中学校独自のカリキュラムがあり、充実した教育を行っていた。しかし、コロナウイルスが流行し始めたため、「異学年縦割り方式」ができなくなったように、多くの至民中学校独自のカリキュラムが頓挫してしまい、最初はどうすればよいかわからず、焦ったそうだった。

し、今何ができるのかを考え、「遠距離恋愛のように思いを生徒に伝え、心の絆をつなぐ」ことを念頭に、課題点検の際に教師が丁寧なコメントをしたり、休校中はコロナ渦だからこそできるような活動（例えば音楽の時間にギターを弾くなど）をしたりしていたということを伺った。このことから、マイナスな状況でも打ちひしがれることなく、逆にそれをアドバンテージと捉えることで、よりよい方向に進んでいくことができるということを学ぶことができた。

後半のグループ協議では、教師と生徒との距離について話が深まった。校則が厳しすぎると、教師と生徒の距離が遠くなってしまい、学校の雰囲気にも影響するのではないかということに加えて、至民中学校の場合は、学校のつくりが教師と生徒の距離が近い要因になっていると以前至民中学校に勤務されていた大橋先生がおっしゃっていた。さらに校長先生との距離の近さが学校の雰囲気につながり、校長先生と話せるなら他の先生と話してみようと生徒が考える。そして結果的に校則で生徒たちを縛り付けている学校よりもよい活動を行うことができるのではないかと議論した。

今回の ZoneA での経験は、大学生の私にとって、とても貴重な経験であった。さまざまな実践や、それに対する様々なご意見など、大学での講義では学べないような内容を耳にすることができた。今回学んだことを糧に、大学生活でさらに多くのことを学んでいきたい。

Zone B

「ベクトルをそろえる～自走する生徒たちと教員たち」

富山県立富山いずみ高等学校教諭 伊井 昌彦

前回2月の福井RTでゾーンB（教師教育）に参加させていただき、二つ収穫があった。一つは長期実践研究報告を終えたばかりの私に、「教員の校内研修」という新たな実践の方向性が見えたこと、もう一つは敦賀高等学校・山本泰弘先生の校長としての実践報告を拝聴できたことだ。私は前任校で同僚たちとボトムアップで探究型授業づくりに取り組み、教師たちの協働や生徒の学びのあり方について考察してきたわけだが、「自走する生徒」を育てる学校づくりを目指す校長先生が、現場の教員組織をいかにリードしていくのか大変興味深いものがあった。

山本校長先生は教員がそれぞれに持つ異なるベクトル（目標・方向性）に対して、3月31日の職員会議で最上位の目標を示した。それが「生徒が学んでいく力を身につける」、つまり「自走できる生徒の育成」であった。山本先生が特に心がけたことは、「毎月の職員会議でも継続して思いを伝える」ことであった。どんなベテランであっても、新しい職場で既存の組織にコミットするのは至難の業である。私もこの4月、工業高校から総合学科・看護科併設の高校へ異動となり、新たな学校文化や関係性の中での再出発となったが、私はすでに五十半ば、前任校での経験や教職大学院での学びを現場に落とし込んでいくことが求められているのではないかと感じていた。

そうした中で今回6月のRTもゾーンBに引き続き参加させていただいた。話題提供者である福井県教育総合研究所長・北川裕之先生からは、これからの大きな変革の時代、様々な情報に触れる必要性を教員自身が自覚すると同時に、教師の学びが自律的に展開されることの重要性が語られた。その実践事例として小中高からそれぞれ報告がなされたが、特に印象深かったのは滋賀県・安曇川中学校研究主任の堤祥晃先生のご発表であった。

堤先生によると、多くの学校がそうであるように、同中学校も生活指導や部活動指導の業務過多により、学びの再構築、授業改善の位置づけは低かったという。こうした現状に対して堤先生は次のような視座に立って教員研修を推進された。

「協働の学び・探究の学びがすべてではない。教育活動にはバランス感覚が大切だ」。

重要なのは教員たちが同じベクトル（方向性）を持つことである。それが新たな実践の推進力になる。そのためには先生方の取り組みのハードルを下げ、プレッシャーを軽減すること、何より（管理職に）「ほめられる」ことがやる気スイッチを入れることにつながるという。研究授業では指導案を簡略化し、授業する教師ではなく学びに向かう生徒の姿を教室の前から見取るスタイルを採用した。また講義形式ではなく、例えば今年度の研究プランを教科の枠を越えた教員グループで考える、そしてその日その時間内に研修を終える。そうした取り組みに底流するのは、教員たちが学習観や授業観をすり合わせ共有する営みである。近年の教育改革では「生徒を主語にする」という文言を目にするが、堤先生のご発表からは、教員自身が「生徒を主語にする」というベクトルを同僚たちと共有し、多様な関わりの中で新たな学びの価値を見出していくこと、何より教員たちが自走することの重要性が語られていたように思う。

私は異動先で新任校長が立ち上げたスクールポリシー推進委員会のコアメンバーとなった。現任校は120年以上の歴史と伝統を持つ。重厚な存在価値を持つ本校だが、生徒が主語となるスクールポリシーを同僚たちといかに創り上げていくか。今回ゾーンBで報告をいただいた先生方や語り合えた先生方との邂逅を土台に「私たち」のあらたな学びを進めていこうと思う。

ラウンドテーブルに参加して

福井市文殊小学校 水野 涼子

昨年度末に「これが本当によかったのか」と、自分を問うひとつの出来事があった。たくさんアドバイスをもらい、自分自身も時間をかけて考え、これが良いだろうと決断したはずだった。事象としては学校運営のほんの一片である。しかし、これまでの自分の学校運営がどうであったか、関わった人それぞれの思いや背景を考え始めると、わからなくなってしまう。そんな時に、ラウンドテーブルの案内を目にし、以前に参加して得た感情を思い出した。久しぶりの対面での開催ということもあり参加をすぐに決めた。

初日は、学校・教育・地域を考える5つのアプローチでは、**Zone B** 教師教育：働き方改革と学び合う学校づくりー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントーに参加。教師の質的向上と働き方改革の両立を目指しどのような組織づくり・運営をしているのかについて改めて考えることになった。北川所長の提供話題では、現場における働き方改革やICT活用の「事例集」について、活用されていないことよりも「事例集」そのものを知らない教員が多くいることに驚いたが、実際のところ本校もそうであった。管理職の推進力の弱さとアプローチ不足に深く反省しながら、渡辺教務主任や入羽校長の実践を聞かせていただいた。どちらの報告も組織としてものごとを推進していくのには、メンバーの納得や合意が必要であり、管理職も含めた対話によって得られていくものだと感じた。もう少し話を聞きたいと思っていた堤研究主任とは、その後同じグループで話を聞かせていただいた。教師が楽しみながらできる研究は、必然的に授業改善や働き方改革につながっていた。また、今年度の研究が『非認知能力』に目を向けたことあたりを詳しく聞きたいと思っていたところ、ファシリテーターの渡邊先生がズバリ聞いてくださった。『非認知能力』は3つの資質・能力をより良い方向へと働かせる原動力であることを私自身が再確認し、それらを育成するための教科や子供の学びに沿った活動、ペーパーに頼らない評価の在り方

について考えることができた。1日目の3人の先生方の報告からは、目標を実現しようとする強い意志力とコミュニケーション力、思い切った決断力や行動力が、自走する組織を育てていくのだと学ばせていただいた。

2日目のラウンドテーブルは、対面型で参加。ファシリテーターは塩川先生。教職大学院の学生さんは、「主体的で協働的な学び」をどのように生み出すのかについて話されていた。メンターの学級経営から子供の発言しやすい雰囲気づくりが主体性を生み出しているというご自身の気づきや、子供自身が課題設定から探求的な学習へと主体的に学ぶことができるような単元構成された社会科の授業実践を聞かせていただいた。福井市内のこども園の先生の報告は、丁寧な「子供の見取り」による実践であった。おにぎりの一口の大きさから支援の在り方や次につながる手立ての工夫、読み聞かせと散歩やおやつといった生活をつなぎ、自分でできることが増えたり思いやりが育くまれたりしたことを話された。お二人の教育者としての温かい思いに沿った実践報告は、大変楽しく、生き生きとした子供の姿が目に見え感動することばかりであった。また聴き手を含めた参加者のやりとりは、丁寧に語り聴き合うことの心地よさを感じた。

参加して良かった。この一言に尽きる。あの出来事の私の在り方の是非はわからないし、これからも答えは出そうにない。しかし、自分の取り組みについて、振り返り捉えなおすチャンスをいただいた。また、同じ時間と場所を共有した参加者の学ぶ意欲に「やる気」と「勇気」もいただいた。

翌日、私の机の上に若い教員の提案授業の省察が置かれていた。読んでみると、授業への思い、参観者とともに子供を語り合うことで見えた子供の姿や自身の学び、このような機会を与えられたことへの感謝などが彼女自身の言葉でつぶられていた。早速、ラウ

ンドテーブルへの参加を勧めた。謙遜する彼女に「ハードルが高いと思ったら、まずは聞き手で参加して

みるといい。次は語りたくなるから。」と言った教頭も、ラウンドテーブル参加経験者である。

Zone C

実践報告で深まる考え

福井大学教育学部2年 木村 日菜多

私は初めて実践研究福井ラウンドテーブルに参加した。ポスターセッションでの発表と Zone C に参加し、自分のこれまでの探求ネットワークでの活動を振り返るとともに、県外で行われている地域活性化の取り組みを知ることができた。普段は関わることのない教育関係者の方々と交流をし、様々な視点からの意見を得ることで自分の考えが深まったと思う。自分の実践を他者に伝える側、他者の実践を聞く側の両方を体験し学んだことを以下に述べる。

まず、ポスターセッションについてだ。私は今回初めて、探求ネットワークの活動で得た学びについてポスターを使って発表した。普段、教育学部の人と関わることが多かったため、探求ネットワークを知らない人に向けて取り組みを説明することが初めてだった。ポスターの作成にあたっては、学びや展望だけでなく、そもそも探求ネットワークとはどのようなものなのか、どのような活動を行っているのか、特徴を簡潔に分かりやすく伝えることに気を付けた。しかし、全ての情報をポスターに載せることはできないので、聞き手が想像しやすいように言葉を補いながら探求ネットワークについて説明を行った。当日の自分たちの発表と他の実践者の方の発表を振り返って、聞き手が飽きないように反応を伺いながら話すことが大事だと学んだ。発表をする前までは、分かりやすいポスターが完成したのではないかと考えていたが、実際に聞き手を前にして、話しながら本当に伝わっているのだろうか、一方的に話しているだけになっていないかということを感じた。そのため、自身の実践を報告するときには、自分が感じたことや学んだことに具体的なエピソードで補足を入れて、

聞き手が話についてこれるか反応をみながら話しをしていかなければならないと学んだ。

次に、Zone C で得た学びについて述べていく。Zone C では持続可能なコミュニティをコーディネートするというテーマで、地域を活性化する取り組みをしている方々の報告を聞いた。その後、少人数グループで報告を聞いた感想や、今の自分と照らし合わせて考えたことを共有し合った。このラウンドテーブルに参加しなければ、このような地域を活性化する取り組みが行われていることを知らなかったと思う。そのため、今回は授業の一環でラウンドテーブルに参加したが、他者の実践を知るためには、このようなコミュニティに自主的に参加していく必要があると感じた。

最初の報告では石井先生の実践を聞いた。この報告では、積極的に自分から地域に働きかけていくことの重要性を感じた。受け身で地域連携に参加していると単発で終わってしまうが、自分から地域に出て行くことで、進めていく側として様々な意見を持てるのではないかと考えた。またそれが次の年につながっていくだろうと感じた。

お話を聞いた後、初めて小グループで自己紹介をし、自身が取り組んでいる活動や学んでいることについて話した。様々な職業、学部という立場が異なる方との対話では自分では考えつかなかったアイデアや意見を知ることができた。特に印象に残っていることは、小学校から高校時代を思い返して、小学校、中学校では地域連携の取り組みが活発であったのに対し、高校ではそのような取り組みが減ってしまった

でもったいないということにグループメンバーの多くが共感していたことだ。それまで続けてきた取り組みが高校に入った途端無くなってしまうのは残念だという意見が出た後に、小中で築き上げてきたものを無駄にしないようにするべきだという意見や、小中で地域活性化の取り組みを経験すれば、大人になったときにその経験を思い出し活かすことができるのではないかという意見も出てきた。異なる年代の方と対話をする中で、どんどん意見が深まっていくことを感じた話し合いだった。

次に、七島先生の実践報告では、高校生が積極的に地域活性化に取り組んでいる様子を見ることができた。上記に高校生になると地域活性化の取り組みがへってしまうということを述べたが、自分が知らないだけで、地域活性化の取り組みが積極的に行われている場所もあるのだと感じた。そして、私は「企画」という言葉に対し、大人がやるものだというイメージを持ってしまうていたのだが、小グループのメン

バーの方から、「子どものアイデアにはっとさせられることがある。ちょっとしたつづやきでも、子どもの言葉を拾う力があれば実現させることができる」という意見をいただいた。それによって、子どものやりたいという気持ちをくみ取って、子どもに働きかけ、様々なサポートができるようになることが重要だと感じた。また、子どもに全てを頼るのではなく、できないことは大人にまかせて、できる人とつながりに行く力が無ければ大人がつなげてあげるというふうには、頼り・頼られる関係づくりが地域活性化には必要なのだと学んだ。

お二方の実践報告と小グループでの話し合いから、地域活性化に関して積極的に行動を起こしていくこと、子どものやりたいという気持ちを受け止め、それをサポートするためにも地域とつながっていくことの重要性を学んだ。このラウンドテーブルで得た視点を今後の学びにつなげられるようにしていきたい。

頼り、頼られる人

福井大学教育学部2年 千葉 雛乃

今回のラウンドテーブルへの参加を通して、多くの気づき、学びがあった。以下に私が感じたこと、考えたことを述べる。

最初は、私たちのポスター発表から始まった。私たちの発表を多くの方に聞いてもらい、質問やフィードバックをいただくことができた。様々な立場の方がいらっしゃったため、それぞれの立場によって考え方や感じ取り方が異なることを痛感した。例えば、教員の方は、学校現場を日々見ておられるため、子どもがスタッフの役割をやりたいと言い出さないんですか？という声や、子どもの年齢や継続の年数によって楽しいと感じることは異ならないのですか？といったように、子どもたちをよく理解なさっていると感じるコメントを多数貰った。また、子どもの学びとスタッフの学びに関しての質問から、どちらもともに成長できる探求ネットワークという活動の素晴

らしさを改めて感じる事ができた。今回、得た質問やフィードバックをもとに、これからの活動をより有意義なものにしていきたいと思った。

次に、zoomでのセッションが行われた。はじめに、石井さんによる、「島しょへき地校からの挑戦状」についてのお話を伺った。石井さんのお話をお聞きして、地域と学校が密接に関わることで、多くのものを得ることができるのだと実感した。私は、これまで学校の先生と地域がそれほど密接に結びついていて、感じた経験がなかったため、石井さんの実践例を聞いて、地域と密接に関わることの大切さを感じた。また、グループでの話し合いの中でも、様々な立場や環境にある人の意見を聞くことができ、私の視野の狭さを痛感した。私の知らないことは山ほどあり、改めて視野を広く持つて考えることの大切さを実感した。特に、高校生の方のお話が衝撃的で、幅広く活躍され

ていて、凄い、の言葉では言い表せない程であった。このような方との出会いもあり、とても貴重なグループセッションとなった。

その後、七島さんによる、「頼る力と頼られる力」についてのお話を伺った。七島さんのお話をお聞きして、特に「福島にはいいところがないのではない、知らないだけ」という言葉がとても印象に残った。これは、私たち福井に住む若者にも当てはまると思ったからだ。私も地元福井をどんな人にも自信をもって自慢できるくらいに、福井のいいところをもっと知りたいと思った。また、周りの人に頼ること、周りの人から頼られること、の重要性を実感した。七島さんの娘さんは、信頼関係を築くことで、頼ってもいいと思われるようになったり、頼ってもらえるようになったりする、というお話をされていたが、この話を聞いて、本当にその通りであると思い、私も人を頼ったり、人から頼られたりする人になりたいと思った。

頼ること、頼られることはそう簡単なことではないと思うため、これから自分が目指す人に近づけるように、精進していきたい。さらに、グループセッションを通して、子どもにもできることは多くあり、子どもを信じて、子どもにチャレンジさせることの大切さに気づかされた。学校では、どうしても先生が子どもに全てを教える、という関係性を築きがちであるが、子どもたちにも子どもたちなりにできることがあり、大人が子どもたちを信じて支えることで、子どもたちの能力が発揮されるのだと思った。そのためにも、子どもたちが自分たちのやりたいことにチャレンジできる環境をつくるのが大切だと思った。

今回のラウンドテーブルを通して、様々な立場の方と出会い、色々な意見を聞くことができ、とても貴重な経験となった。本日学んだことを、これからの探求ネットワークでの活動や、私の将来に生かしていきたいと考える。

Zone D: International

Improving the Quality of History Education Through Lesson Study

Bukit Jalil Sports School, Kuala Lumpur, Malaysia Santiya Parthippen

Lesson study is a highly specified form of classroom action research focusing on the development of teacher's practice knowledge. It involves group of teachers or teachers and board members with education background planning collaboratively, teaching, observing, and analysing learning. Teachers meet in regular over period of time (from several month to a year) to work on the design, implementation, testing, and improvement of one or several 'research lesson'. Lesson study is focused on specific teacher-generated problem or goal and carefully planned in collaboration with one or more colleagues and the classroom observation is recorded for analysis and

reflection. Lesson study components includes designing the lesson, practise the lesson, open class research, group reflection, reconstruction of the lesson, and writing a report.

The reasons for implementing lesson study as one of the teaching practises are because it promotes co-learning environment and co-inquiry atmosphere. Teacher as a lifelong learner will continue to learn by sharing the information and knowledge with others and this will make the learning and delivering skills grow and at the same time increase the confident in them. Lesson study expand a good classroom practice because it can be a tool to introduce new ideas to learn students' strengths. As we know, open

class research as one part of the lesson study allows the observers to learn by watching other's teaching practices. Observers of the open class research help the teacher by taking notes and gathers information thus will share it with the teacher in the post-lesson study. This benefit other teachers, teacher trainees, researcher or public when they read and analyse the current learning practices that are being conducted in schools.

After back to Malaysia after spent a year and a half in University of Fukui completing my research in Teachers Education focused on collaboration in learning, I decided to try implementing lesson study practice in my school with hope to boost teachers' collaboration and improve students learning. While staying in University of Fukui, I was exposed to the practise of lesson study in various of conferences and also got a chance to participate in lesson study activity as co-planner of lesson design, guest teacher and observer. While following these activities, I realised that implementing lesson study in classroom can be a great help for the teachers since all involved teachers will come with good activities for the whole unit's lessons and will reflect on it together for a better classroom practise in the future.

The theme of the lesson study was 'World Conflict' focused on World War I and II, History Form 4 (2nd year of High School). Before the implementation of lesson study, History teachers made a plan together to discuss and decide the theme, teaching duration of the full unit (8-10 hours), activities and the materials. Few meetings were carried out to ensure the success of the program. I prepared and handed the instructional plan with the list of activities for the whole unit to the involved teachers and also to the school administrators. Open class research was held on 2nd June 2022, on the fourth lesson from total eight lessons of the unit. Total students were 16 and co-teaching were done by two teachers for the unit. Observers includes principal and vice principal and ten other teachers from various of subjects. The topic concerning the motive of World War II, and the main activity is about students sharing their

findings in the new formed groups (different groups from their data finding groups). Collaborative learning provides students the opportunity to discuss and have higher level of thinking and by discussing in group, the information can be memorized for longer compared to individual learning. In our unit design contains eight lessons in total, we included different kinds of student-centred activities to encourage them to develop their ideas while discussing and arguing with each other in order to solve the lesson's problem. While observing the lesson, the observers also did help the students by giving some hints since few students in the class are weak in History. The lesson was summed up by teacher after students shared their refection of the lesson in a piece of paper provided in every group.

Group Reflection was held in school's library a week after the open class research. Six participants from different subjects includes me gathered and discussed about the lesson of the open class research. We shared our impressions, thought, and gave comments on the things that can be improved. I received many useful ideas from the teachers who participated as observers on the day. The more participants on open class research, the easier to gather information on the students' learning styles because each teacher view the students closely and think in different perspective especially when they teach dissimilar subjects. The teachers also helped me by giving advice on how to help the passive students in the classroom. By sharing our insights, we came up with many possible activities that can be use in the next lessons, for example, a Malay Language teacher suggested for more off-classroom activities like tell a story or present their work to any teachers they want. This is to build a confidence in them. I realised that group reflection is foremost important key for the lesson study because when teachers gathered and talk through on the learning approaches and teaching strategies, or about the students' learning styles and problems, each participants go deeply into the issues or obstacle faced by the teacher and try to find a solution together. Reflection meeting also become a medium for the

teachers to learn from each other and to praise and motivate for a better improvement.

While implementing lesson study in Bukit Jalil Sports School, I did face some challenges. I had limited time to discuss in detail about lesson study to other subject teachers or the administrators since I just came from Japan a month before we decide to implement it in our subject. Because of lack of time, I realised that most of the teachers couldn't grasp a better understanding on how it should be carried out. Turned out some teachers not finding it important enough to be practiced in lessons, and they are seeing open class research as evaluation by the observers on how the teachers is running their lesson. I believe that I need to explain to them about the benefit of lesson study to the teachers and the students since I went through few activities myself while in Fukui. Teaching in sports school have its own challenge which is the students are always busy with sports practices and tournaments, so all lesson activities involving groups had to be something that can be done in lesson period because they don't have much time to work collaboratively out of school time. I had to talk through with other History teachers and decided on some collaborative activities that don't take much time but work effectively.



I discovered that the implementation on lesson study practice in my school helped me



received many teaching approaches ideas after went through discussion with other teachers. Some teachers also encouraged me by sharing materials and ideas for a better classroom lesson. I learnt that by sharing our teaching approaches and strategies, the teachers can help each other to improve by focusing on collaboratively planning and revising a lesson together. The open class research really benefitted me because on the day, I had around extra 13 pairs of eyes to look closely at the students and take notes on their learning, and then shared with me on what they witnessed in the classroom. Even though it was my first time running a lesson in front of many other teachers, surprisingly I don't feel uncomfortable at all because I know they are here not to judge me but to help me to improve the History lesson. I also feel thankful to my principal and other administrators for letting me applying lesson study in our teaching practices and I hope to receive continues support from them for a better improvement on students learning in History.

Reflection on the Roundtable Presentation held on 18th of June 2022

International Initiatives on Collaborative Learning Teacher Education Reform through Lesson Study

National Trainer-Physics, SESEMAT, Uganda **Makafu Rogers**

In the presentation from Uganda, participants highlighted the impact of the SESEMAT programme (2005 - 2022), which included a range of contributions to: key reforms, policies to improve teacher professionalism and development, learner competency and enhance teacher motivation. For instance: National Teacher Policy (MoES, 2019), New Lower Secondary Curriculum (LSC) (NCDC, 2018), enhancement of science and mathematics teacher's salary (Budget, 2022) and promotion of science teachers to administrative positions (2022). The programme introduced in-service training, school-based lesson study and other initiatives that have improved the professional outlook of a science teacher. Although there is surface knowledge about lesson study in Uganda, a lot of effort is still needed to engage teachers in lesson study.

Lesson study implementing challenges

The challenges faced by teachers during lessons are similar to what the presenter from Malawi and Malaysia pointed out. Majority of teachers feel that there is no time for lesson study, school administrators hardly support lesson study and there are insufficient materials for lesson study. The success of lesson study largely depends on how one convinces teachers and school administration about its value. To teachers, lesson study should answer their difficult teaching areas, and perhaps to the administrators, lesson study should focus more on improving students' performance. In the case where teachers are participating well in lesson study but not applying learnt lessons in their respective lessons, administrators may hardly support

lesson study in the schools.

The participants from Malawi pointed out that the student-centered approach is limited in the sense that absolute autonomy to students may delay the implementation of the curriculum. Students may not learn within the stipulated curriculum. At one moment, our teachers had a similar challenge; they applied a student-centered approach with total freedom to students with no or less guidance. During a lesson they only provided a worksheet with procedural instructions. It was upon students to interpret the instructions on the worksheet, yet in some cases, the instructions were unclear. This kind of approach may discourage some students, making some of them give up.

The participant from Malaysia narrated a good story of activities of lessons study. She seemed to have good support from her school principal. Her experience of lesson study in the history subject was good because the SESEMAT was focusing on lesson study only teachers of science and mathematics. With the introduction of the new competence-based curriculum with an emphasis of student-centered and activity-based lessons, there could be a great opening of lesson study among arts teachers.

A number of comments about lessons were raised during a roundtable. These included: limitation of student-centered approach in completion of the syllabus and how can a teacher deal with this challenge; lack of school administrative support and time for lesson study. In the Uganda case, we embedded the lesson study on the school

timetable to avoid the cost of extra time for teachers.

Student-centered lesson strategy

Sensei from Fukui university concluded by responding to questions asked and comments made during the presentation. The main concern was the difficulty for learners to get quality learning through a student-centered approach where the degree of freedom of the learners is too high. In many cases, students take advantage of the freedom. However, he noted that teachers can deal with this situation in four components. First, teachers should think and ask clear and easy-to-understand questions so that learners do not give unreliable responses. Secondly, teachers should encourage students and give enough time to reflect fully in a lesson. Thirdly, teachers should encourage learners to cooperate, collaborate and work as a team when given tasks. Fourth, teachers should always ventures understanding how their own students learn and understand concepts. It is vital that teachers avoid imposing their own ideas on students but help them make relevant choices. When student proposes an alternative idea, a teacher should not hurry to say “no” without giving more chance to explain his or her no. The teacher should give hints for a student to approve or disapprove his/her own answer.

Student-centered, activity-based and formative assessment in the new curriculum reform in Uganda

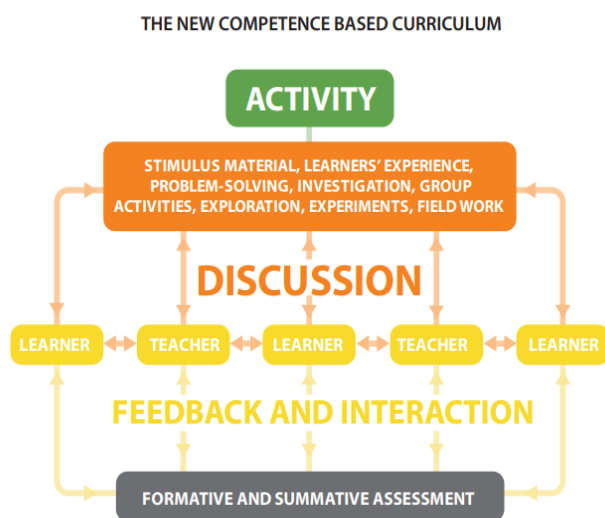


Figure 2. New lower secondary curriculum design framework

In Uganda, to some extent, this way of lesson facilitation has been adopted and documented in the new lower secondary curriculum under the concept of formative assessment and triangulation. This approach is neither fully student-centered nor teacher-centered, but a trade-off and balance of both teachers' involvement and students' participation. The teachers are expected to introduce scenarios and activities to prompt students' thinking. During the lesson the teacher converse with his/her students; asking the questions as students respond. The teachers' questions should help students to formulate hypothesis and further questions for investigations. They make their guess of the outcome. The key variables are identified. The limits of the input values in the independent variables are also identified. If there are any risks in the experiment/investigation, the teacher should provide clear precautions to the students to avoid harm to the students.

Illustration of triangulation in the lower secondary curriculum

The Figure 2 shows S.1 students in a chemistry lesson of the new lower secondary curriculum. This is an introductory lesson about laboratory rules. In this lesson, students are expected to learn about laboratory rules to avoid likely accidents during experiments.



Figure 1. Introductory lesson for chemistry in the competence-based curriculum

How is the concept of triangulation implemented? In this

lesson students are given scenarios and photographs of accidents in the laboratory or during chemistry experiments. Teacher implements the concept of triangulation, which involves: (1) teacher converses/talks with students or students talk among students in pair or groups to accomplish a task given (2) teacher observes what students are doing so that the he/she gives appropriate feedback, (3) students provide a product as the final outcome out of their discussions, observation and explanation.

For example, during conversation, there was verbal engagement such as: “Good job....is there any other way... can you explain this so your friend can easily understand...”, pointing, marking with a red pen, smiling and mutual teaching. This is important that rather than a teacher giving one-on-one advice to struggling learners,

he/she encourages pair or group learning, which can lead better to overall class improvement.

I thank Sensei, who pledged support for the training physics teacher in Earth and Space physics – Astronomy.

Conclusion

I learnt new lessons learnt from presenters from Malawi and Malaysia and experiences from sensei from Fukui university in this roundtable. The COVID19 pandemic stowed the progress of activities including lesson study in schools. The new lower secondary curriculum is a great opportunity for teachers to learn more from each other through lesson study. We look forward to revive **ISABLES** in order to build capacity of teachers to facilitate **co-inquiry and reflective lesson study** and **community of practice** for sharing experiences, challenges and future actions on the lesson practice.

Zone E

新たな発見と学び

ミドルリーダー養成コース 五十嵐 浩介

私が「ゾーンE」と出会ったのは、昨年度の2月のラウンドテーブルであった。小学生、中学生、高校生、そして、大人が混ざり合ったグループでの話し合いは、とても新鮮で刺激的な時間であった。そして、6月になり、私は迷わずに「ゾーンE」に参加することを決めた。今回もたくさんの発表を聞いたり、多様な人たちと意見交流したりすることは大きな収穫となった。

まず、驚かされたのは、最初のポスターセッションでの大学生の発表である。地元石川県の知事選挙が行われることをきっかけにして、「自ら考え、決定する選挙」を実現しようと「イシカワ事変」を起こしたというのだ。候補者に対して学生目線のインタビューを行ったり、SNSで発信したりしながら、若者に

選挙に関心をもってもらおうと活動を展開していた。そのアイデアと行動力に驚くばかりであった。学校では主権者教育のもとで政治の学習を行っているが、不十分なところもあることを感じさせられた。若者の選挙離れが進んでいる中、大学生という若い人たちが行動を起こしていることに喜びを感じることもできた。

次のセッションでは、「動物介在教育」の発表がとても印象に残っている。教室の中で「青虫」「メダカ」などの学習に利用する生き物を飼育することはあるが、「犬」が教室にいることには本当に驚いた。教室の中で子どもと犬が一緒になって過ごすことが想像できず、どうやって過ごすの？という疑問しか浮かばなかった。犬と共に過ごすことによって、子どもに

としての心地よい居場所につながり、それが自己実現につながっていくことを聞き、動物と触れ合うことによって心が安らぎ、自然と笑顔が生まれることを自分自身も何度も経験していることを思い出した。教室や学校の空間が心地よい空間に変わり、子どもたちもよりよい姿に成長していくのだと思う。グループで話し合った時に、ある幼稚園でも犬と共に過ごしていることを知り、実際に見せてもらうことができた。園児たちは登園することを楽しみにしたり、触れ合う時間を楽しんだりする様子が見られるようである。多様な教育活動が行われている中で、「動物介在教育」という新たな発見をすることができ、これもラウンドテーブルだからこそできる学びだと感じている。

最後のセッション「学校新設プロジェクトをはじめよう」も中学生や高校生を交えて、自由な意見交換

をすることができた。中学生や高校生から話題として挙がったことは、自分と他者との「交流」であった。異学年との交流、他学科との交流というように、自分だけではなく他者との学び合いを求めていることが見えてきた。コロナ禍の影響もあるのかもしれない。自由な学び合いや交流が実現することによって学校全体も活性化され、子どもたちも自信をもって学校生活を送ることができるはずである。他のグループの発表も聞くことができ、形にとらわれない自由なアイデアが紹介され、教育活動も柔軟に考えていく必要があると感じた。

「ゾーンE」を通して、本当にたくさんの人と触れ合い、多様な考えを聞き、新しい見方・考え方を得ることができた。このような対話をこれからも大切にして、教師としての「幅」を広げていきたい。

新たな発見と学び

慶應義塾大学法学部3年 内島 駿介

「挫折を挫折として捉えさせないために何ができるかを考えなければならない。」

2022年6月18日に行われたラウンドテーブルZone Eで最も印象に残った言葉である。慶應義塾で学ぶ傍ら、教育にも関わりを持ってきた。公募して集まった高校の先生方と共に総合教育のシラバスを作成・実施したり、都内の学童にて開成高校弁論部監督と共にディベート講座を開講したりといったところだ。もちろん、現場の先生方には到底経験で及ばないが教育については自称熱い男と名乗りたい。

2022年6月11日、国際理解教育学会に登壇ゲストとして呼んで頂いた際に私は「政治と教育」というテーマで考えを述べさせて頂いた。『学生が候補予定者にきくっ!!』と題して選挙立候補予定者の方へのインタビューを配信する活動をしており、そのような活動を行おうとするほどの政治的関心を育むために教育は何ができるのか、そういった意図の人選で

あったと思う。教育学の研究者からは非常に示唆に富む意見を頂いた。今回のラウンドテーブルでは、そのような意見も検討した上でぜひ現場の先生方の政治教育についての意見を頂きたく思い参加させて頂いた。

総合教育において、そこで創造されたアイデアを発表して終わりにせず、地域課題を扱ったならばそれを市議に提出する所までを一体のカリキュラムとすることが出来ないか。私は、政治教育のアイデアの1つとしてそう述べた。その反応として、頂いたのが冒頭の発言である。政治的関心を上げるためには、自分の力で社会を変革できるという効力感の養成が必要であると考え。しかし、もし市議に提出してもそれが全く採用されなかった場合には、むしろ無力感を植え付けるのではないか。生徒にとって不採用の事実、自分のせいで採用されなかったという責任の問題ばかりか、自分自身が否定されたと感じると

いった自己存在の問題に直結しうる。そのような指摘は初めてであった。決して全員がそうなる訳ではないと思うが、重要な指摘であるように思う。挑戦させることの裏側にはその失敗によってむしろ挑戦心を失わせる危険が潜んでいる。これまで、自分の周りでは失敗したら検討して再度挑戦すればいいという価値観がありふれたものであった。これまでの教育に関する自分の活動を振り返るとき、挑戦が孕む危険をどれだけ意識できていただろうか。その過程で、もしかすると、その危険を実現させてしまった生徒がいたかもしれないと思うと背筋が凍る思いである。

今回のラウンドテーブルでは、三国高校・札幌大通高校の生徒の方から非常に興味深い実践をご紹介頂いた。彼らのような生徒に対しては、より幅広い視点をもって挑戦できるような環境づくりや働きかけをして行くと共に、今回のような場の壇には上がることがない生徒たちがむしろ挑戦心を剥奪されないた

めの配慮も忘れてはならない。そして一大学生でしかない私がいうのは大変傲慢であるのは承知の上であるが、現状難しいと思われる他校の実践であつてもそれが真に優れたものであるならば、変革に向けて行動を起こしていく必要がある。聞きっぱなしは非常にもったいない。こうあつてほしいという理想と簡単にはそうはならない現実の狭間で藻掻き続ける。人という不確定要素を扱う教育にはそういった宿命が一層強く纏わりついている。

最後にはなるが、今回のラウンドテーブルで関わらせて頂いたすべての方に感謝申し上げたい。私のプレゼンに対して鋭い指摘をして下さった皆様、興味深い実践を紹介して下さった登壇者様、そして執筆の打診をして下さり、会場にて場を盛り上げられていた高校時代からの恩師である前田健志先生に感謝しきりである。

教職への扉をひらく 長期インターンシップ

福井大学連合教職大学院

実践力ある 21 世紀の教師を育てる
教職大学院の先端モデル

第 1 回 オープンキャンパス (オンライン)

2022 年 **8 月 18 日 (木)** 14:30~16:30

参加をご希望の方は「オープンキャンパス希望」と件名にお書き添えの上
dpdtfukui@yahoo.co.jp まで御連絡ください



学校で 1 年間週 3 日 実践経験を重ねる。＜インターンシップ＞

- 総体を学ぶ 授業づくり・生活指導をはじめ教職の総体を学ぶ
- 仲間と学ぶ 仲間や先輩と語り合う週間カンファレンス
- 充実した支援 学校の現職教師と大学院の教員がチームで支えます

実践と理論のサイクルをつくる。＜実践研究＞

学校での経験をとらえ返し、検討し、問い進める実践研究

教職への歩みを支える。＜財政支援の充実＞

一般の奨学金・学費免除等に加えて、福井大学連合教職大学院独自の
スカラシップ（奨学金）をはじめとする就学支援制度を進めています。

連絡先

福井大学連合教職開発研究科（連合教職大学院）
〒910-8507 福井県福井市文京 3 丁目 9-1
Tel. & Fax. 0776-27-9872

入試情報の詳細は下記 URL へアクセス

<http://www.fu-edu.net/>

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

Schedule

10/22 Sat.	月間カンファレンス A 日程、	10/29 Sat.	同 B 日程
11/19 Sat.	月間カンファレンス A 日程、	10/26 Sat.	同 B 日程
12/24-26	冬期集中 a 日程、	1/5-7	同 B 日程
1/31	長期実践研究報告締め切り		
2/5 Sun.	長期実践研究報告会		
2/18,19	実践研究 福井ラウンドテーブル 2023 Winter Sessions		
3/16	運営協議会		

【編集後記】いよいよ前期最後の Newsletter をお届けします。令和4年度が始まってまもなく8月になり、時間の経つ速さとその中で自分が達成できたこととその価値について新たに考えさせられました。皆さんそれぞれが置かれている状況が異なるからこそ、Newsletter で共有される内容の意味が見出されるのではないかと感じます。今回は6月のRTの感想文も掲載していますので、ぜひお楽しみください。引き続き後期でもよろしくお願い致します(Y, M)

教職大学院 Newsletter No.162

2022.8.22 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp